

トリガー・イベント

灯家ぷろふあち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦これSS

百合もの

カップリングはビスマルク×アークロイヤル

相変わらず各キャラの特徴を掴みきれているわけでは無いので台詞回し等に違和感を覚える方がいるかもしれません。

上記の点を納得頂いた上でお楽しみ頂ければ幸いです。

(なお、この作品は以前に別々の短編として投稿していた物を連載形式としてまとめた上で改めて投稿し直したものです。この点も併せてご了承願います)

目次

トリガー・イベント	1
アークロイヤルが困るワケ	54

トリガー・イベント

鎮守府内をバタバタと駆け回る音が聞こえる。そしてレシプロ機のプロペラ音がそれに続く。

駆ける音の主はビスマルク。それを追っているのはソードフィッシュという複葉機だ。艦娘が航空機の空襲を受けているという事は、よもや、ここに深海棲艦の襲撃でもあったのではあるまいかと考えたくもなるのだが、実はそうではない。このソードフィッシュという機体の主人は、その名をアークロイヤルと言い、最近この鎮守府に着任したばかりの艦娘であり、れっきとした味方なのである。どういう訳かこのアークロイヤルという艦娘、ビスマルクに執着でもあるのか、やたらと彼女の事を追い回したがるのだ。

「逃げるんじゃないビスマルクッ！ 止まれっ！ ソードフィッシュ！ やれっ！」

アークロイヤルはそう叫びつつソードフィッシュに攻撃を指示する。あくまでビスマルクそのものには当たらないようにした、一種の威嚇射撃であるが、ビスマルクにしてみれば当然そんな事はどうでもいい事だ。このままだとどうなってしまうのか、などと思っていると、ようやくビスマルクを護衛すべく何人かの艦娘が駆けつけて来た。彼女達がソードフィッシュを撃退し、アークロイヤル側にも艦娘が駆けつけて彼女を止めに入っている。

ビスマルクは助かった、と思いつつ、こんな事が一体いつまで続くのか、とせえせえと荒い息を繰り返しながら思っていた。アークロイヤルの着任以来、同じような騒ぎが既に複数回発生しており、他の艦娘達も騒動を聞きつけて、ああまたか、と呆れ返る状況になっているのである。

そんなある日のこと、ビスマルクは鎮守府にある食堂で昼食をとっていた。しかし、思うように食が進まない。それはそうだろう、アークロイヤルが着任して以来のドタバタがストレスとなってしまうって、ビスマルクの食欲にも影響を及ぼし始めているのである。

「はあ……」

食事中にもかかわらずため息が出てしまう。そんな時、

「ちよつとここ、相席いいですか？」

と、声をかけて来た者がいた。ビスマルクが視線を上げると、そこにいたのはリットリオであった。

「ええ、いいわよ」

と、言うリットリオはビスマルクの前の席に座り、トレーに盛り沢山に乗せられたメニューをパクパクと食べ始めた。

「相変わらず食べるわねえ、あなたは」

と、ビスマルクが言うと、

「ええ、私って食べるの大好きなものですから」

と、明るくいうリットリオ。

自分が食べようにも食事が喉を通ってくれない状態なので、羨ましいわね、と思いつつ、こんな事も聞いてみる。

「そういえばあなたって体重増えたとか言ってなかった？ そんなペースで食べて大丈夫？」

「うっ……。でも、きちんと運動して現状維持は出来てますから、今の所は問題無いかなあ、と」

リットリオが焦りながら言う。

「そう、それなら良かった」

実際、多少体重が増えようが食欲が無いよりははるかにマシである。軍事に携わる者というのはその業務の性質上体力の消耗が激しく、その分カロリーを摂取する必要がある。逆に今のビスマルクみたいに満足に食べられない状況はまずいのだ。

ビスマルクがそんな事を考えていると、ふと、リットリオがその食べる手を止め、食堂の外の方を見て、こう言う。

「それにしても最近天気悪いですよね。この時期の日本ってこんなものなんじゃないか？」

「それはちよつとわからないけど……。ただ、他の子に聞いた話だとかういうのはやっぱり珍しいみたい」

気象に関して言えば地域の差異が大きい土地柄の国ではあるが、少

なくともこの時期に毎年このような天気になるような事は無いという事だ。それぐらい雨や曇りの日が多く、陽の光が地面を照らす日が少ない。

「こんな天気が続くと気が滅入るわね……」

と、ビスマルクがため息をつくとき、リットリオがこう返す。

「あなたの場合、天気だけが原因じゃないんじゃないんですか?」

その途端、ビスマルクは顔面を硬直させ、すぐにうんざりしたような顔で、

「……やっぱりわかる?」

とだけ言った。

「あれだけの大騒ぎしてるんだからわかりますよ。……例のイギリスの空母でしよう?」

アークロイヤルがビスマルクを追いかけ回すのははや日常と化しつつある。幸いリットリオはまだ騒動に巻き込まれている訳ではないが、二人のいざこざを止めるために既に何人もの艦娘が駆り出されているのだ。

「距離置きたいってのが伝わって無いみたいなのよね。おまけにソードフィッシュまで飛ばして来るとか最悪……」

ビスマルクはうなだれている。今でこそ人間の肉体に魂を宿した存在であるが、元々艦娘の前世は戦闘に従事する艦船であり、鋼鉄の塊だ。その鋼鉄の塊であった頃に第二次世界大戦という人類史上最大規模の戦争が勃発し、多くの艦船がその戦闘の中で沈んで行った。艦娘として現世に舞い戻る事が出来たのはその内のごく一部であるが、その一部の中でも因縁のある関係を持った者というのはいるもので、その端的な例がビスマルクとアークロイヤルという事になろう。その辺りの事情についてはリットリオもある程度知っている。

「無神経な事を聞いちゃうかもなんですけど」

と、リットリオは前置きしてから、

「アークロイヤルの事を避けたいのは分からなくも無いんです。でもソードフィッシュってそんなに嫌なんですか? 流石に今のあれは

あなたへ危害を加える訳では無いと思うんですけど」

と聞くと、ビスマルクは渋い顔をして、

「それは、ものすごく嫌よ。まあ、分かりにくいかもしれないけど、そうねえ……」

と、言つて一考してから、

「例えば、投下するつもりがなかったとしても、私がフリッツXを振り回しながらあなたを追いかけたら、どう思う？」

と、返してきたので、思わずリットリオは息を呑んでしまった。

フリッツXは誘導爆弾の先駆けともいうべき兵器で、ドイツによって開発され、欧州戦線に投入された。前世のリットリオもこのフリッツXの被害を受けているのである。同時に攻撃を受けた妹艦のローマと違い、即座に撃沈される程の事態にまでは至らなかったが、それでも損害は大きく、ギリギリ沈まないで済んでいるというレベルであり、何とか自力航行こそ可能なものの、再び戦闘に参加することなどままならぬという状態で終戦を迎えた。その後のリットリオは無用の長物として数年間放置された後、最終的にはスクラップにされてしまった。

そんな事を思い出して顔を引きつらせるリットリオを見ながら、

「ね？　そういう事、なのよ……」

と、弱々しい笑顔とともに言った。

リットリオも何も言えない。そんなリットリオに対してビスマルクは、

「じゃあ、私は行くわね」

と言つて席を立った。

「え、あなたのご飯、大分残ってますよ？」

と、リットリオが聞いても、

「食欲が無いのよ……」

と、力無く言うだけで、残り物の入ったトレーを返却しに行つてしまった。

(相当深刻ね……)

心なしかふらついているようにも見えるビスマルクの後ろ姿を眺

めながらリットリオはそう思った。ビスマルクにとって、アークロイヤルからソードフィッシュを差し向けられるのがどれほど怖い事なのか。それを理解するという意味では、仮に目の前でフリッツXを振り回されたら、という例え話は、確かにリットリオにとっては分かりやすい。

実際の所、前世においてフリッツXを投下されたという過去はリットリオにとって恐ろしく、忌々しい記憶であるし、今だに思い出しても一気に暗い気分させられてしまうような出来事なのである。

とはいえ、リットリオに対する攻撃を実行したのは当時のドイツ空軍であり、ビスマルクではない。そもそもリットリオが攻撃を受ける遙か前、フリッツXの試作機による飛行試験が開始された時点でビスマルクは沈んでいたのだ。たとえ恨むとしてもそれは当時のドイツという国が対象となるべきであって、フリッツXの一件でビスマルクに当たるのはいくら何でも理不尽だろうとリットリオは思っている。国家という枠組みの一員という意味であればそこに遺恨もあるという事にはなるのだが、それはあくまで国家同士での比較だからそうなのであって、個人レベルであればリットリオとビスマルクは当事者同士ですらないのである。

が、ビスマルクとアークロイヤルの関係となれば話は別だ。艦船であつた頃のビスマルクの最期は壮絶である。当時のイギリス海軍はビスマルク一隻を撃沈するためにその時点で稼働可能な大型艦のほとんどを動員し、その数の差で持ってビスマルクを半ば包囲する形で集中砲火を浴びせたとリットリオは聞いている。ビスマルクを直撃した砲弾の数は実に400発にも上り、砲塔は全て吹き飛ばされ、反撃する手段を失ったことから最終的に自沈処分という事にはなつたようだが、イギリス側はそれでもなおそんな状態のビスマルクに対して攻撃を継続したというのだから自沈処分などしなくても沈むのは時間の問題だつたらう。しかも砲撃を受け始めた時点でビスマルクは舵が破損していた為、満足に航行も出来ない状態であつた。迫り来るイギリスの艦隊を目の前にして彼女はどれほどの恐怖と絶望を感じていた事であろうか。そしてその直前までビスマルクの追撃を行

い、舵を破壊することで彼女が沈むトリガーを引いたのが他ならぬアークロイヤルなのである。たればの話ではあるのだが、アークロイヤルの追撃をかわせてさえいればビスマルクがあの時点で力尽きる事は無かった可能性が高い。だからアークロイヤルの姿を見てビスマルクが反射的に恐怖感を覚えてしまっても無理からぬ所がある。

更に追い討ちをかけているのが、現在アークロイヤルがビスマルクに対して取っている行動である。絶えずビスマルクを探し続け、視認した途端に追いかけて出すというのがかつての大戦時の行動そのままならば、逃げるビスマルクを足止めするためにソードフィッシュに攻撃を行わせるといいうのもかつての大戦時の行動そのままなのである。前世のビスマルクはこの一連の行動の結果、死ぬ事になった。そんな過程を現世でも再び体験させられているのだからたまたまのものではないだろう。ここで更に問題となるのは、アークロイヤル側には大戦の時とは違い敵意や害意の類は全く無いという点だ。純粹にビスマルクとの和解を望んでいるようにも見えるのだが、現状を見る限り、その試みは明らかに逆の結果をもたらしている。行動の結果として却って相手を怯えさせているという自覚が無いようであり、悪意が無い分非常にたちが悪いとも言えた。

「このままだと本当にあの子、参っちゃいますねえ……」

そうリットリオは独り言ちた。彼女の所属している鎮守府は特段厳しい規律もなく、かなりオープンで鷹揚な雰囲気漂っている所だ。出身の国が違うからどうだと言ったことも無いから、リットリオもスムーズに他のメンバーと馴染むことができた。もつとも、これはこの鎮守府の中では比較的古参とも言えるビスマルクがそれとなく手助けしてくれたことも大きい。彼女はその言動から少々高飛車な印象を相手に与えてしまうことがあるのだが、実際には結構面倒見が良く、何かあれば相談に乗ってくれることも多いのだ。そんな彼女がらしくもなく悲鳴をあげながら逃げ回っているのは明らかに異常事態であり、リットリオとしては大いに心配してしまう。先ほど、ビスマルクに声をかけて相席をお願いしたのも彼女の様子を知りたくなつたからである。その憔悴ぶりは想像以上で、普段のビスマルクの

気丈さはほとんど感じられなかった。放っておいたら本当に倒れてしまうのではないか。このままでいい訳は無い。しばらくの間リットリオはその場で考えていたが、ふと顔を上げて、

「たまにはこっちが面倒を見てあげないといけませんね」

と呟き、立ち上がってトレーを片付け始めた。リットリオはビスマルクをどうにか助けられないか、行動を起こしてみる気になったのである。

リットリオの見るところ、ビスマルク側もアークロイヤル自体をそれほど嫌っているという訳ではない。もし本当にアークロイヤルの事が嫌いなのであれば、呂500に自身の護衛を頼むと言う手もあるからだ。前世のアークロイヤルはUーボートに沈められた。そんなUーボートを日本向けにローカライズした呂500はこの鎮守府において最もアークロイヤルが苦手とする存在なのだ。護衛というのであれば、あるいはグラーフ・ツェツペリンでも良い。この鎮守府にアークロイヤルが着任して以来、幾度となく襲い来るソードフィッシュからビスマルクを守っているのが彼女である。もちろん、呂500にしてもグラーフ・ツェツペリンにしてもそれぞれの任務や用事がある訳だから、四六時中ビスマルクと行動を共にする訳にはいかないが、大体の時間帯において元Uーボートたる呂500や、ソードフィッシュを迎撃出来るグラーフ・ツェツペリンを同行させておけば、アークロイヤルに対する強い警告となり、拒絶の意思表示としての効果も期待出来る。

だが、今の所ビスマルクはそんな行動を起こそうとは微塵にも考えていないようだ。アークロイヤルに悪意がない事が分かっているからなのだろうが、アークロイヤルを傷つけたくはないという事でもあろう。そんな所がビスマルクの甘い所であり、優しさでもあると言えた。ともかく、ビスマルクが求めているのは落ち着いて会話をする機会なのではないだろうか。

まずは、それとなくアークロイヤルに話を聞いてみる事にしよう、そうリットリオは思い定めた。

その翌日。鎮守府に帰投してきた艦隊がある。今はまだ朝と言って良い時間帯であるから、長時間の遠征の帰りなのか、あるいは夜戦でもあったのかもしれない。そう思った時、ふと、夜戦を前提とした作戦行動を行う艦隊が1個艦隊、昨日出撃したことをリットリオは思い出した。そしてその戻って来た艦隊の中にはアークロイヤルの姿もあつた。彼女は空母でありながら、夜戦にも対応できる能力を持つという、かなり珍しい存在である。そのアークロイヤルに声をかける。

「ああ、リットリオか」

と、普段通りに応ずるが、その姿を見ればかなりの被弾の跡が見え、敵方の攻撃の激しさを伺わせる。

「タフな相手にぶつかっちゃったみたいですね」

そうリットリオが言うと、アークロイヤルはふふつと笑い、

「今回はアドマイラルに結構無理を言って参加の許可を貰ったからな。こうなるのは想定内だよ」

と、事もなさ気に言う。

「えっ?」

リットリオからはそんな言葉が口をついて出た。無理を言って参加の許可を貰ったと言う事は、提督は当初今回の作戦にアークロイヤルを参加させるつもりは無かったと言う事だ。それも、まだ彼女にはハードルが高いと判断していたからだろう。しかも、その事は当のアークロイヤルも自覚しているようだ。にもかかわらず敢えて参加したとは一体どういうつもりなのか。

「アークロイヤル、今からちよつとだけ時間を貰っていいですか?」

やや切迫したような口調でリットリオがそう言うと、アークロイヤルは、

「ああ、構わないが、ほんの少しだけ待っていてくれ」

と言って、艦隊の旗艦を務めていた艦娘に入渠の開始がしばらく遅れる事を伝えてから戻ってきた。

「これでしばらくは大丈夫だ。一体何だ?」

「二人きりで話せる場所に移動しましょう。ここだとちよつとね

……」

そう言つてリットリオはアークロイヤルを伴つて鎮守府の敷地のはずれにある人気の無い場所へと向かった。雨こそ降りそうも無いが、雲が空一面を覆つており、相変わらず天気は重苦しかった。

「それで、二人きりで話したい事っていろいろのは？」

アークロイヤルが尋ねる。それに対してリットリオは難しい顔と共に腕組みをしながら、

「あなたが夜戦もこなせるって話は聞いているんですよ」

と、切り出した。

「ああ、どうやら空母で夜戦が出来る奴は少ないようだからな。それだけでもここの役には立てると思つてるよ」

「ええ、そうでしょうね……」

そう相槌を打つリットリオが気にしているのはそこでは無い。先日赴任してきたイギリスの空母は練度が十分で無いにもかかわらず、演習に加えて実戦でも昼戦、夜戦に関係無くやたらと出撃をしたがり、あまり休息も取りたがらないらしい、実はそんな噂が立っているのである。そんなアークロイヤルに対して少なくとも艦娘が頼もしさを感じる一方で、同時に不安をも感じているというのが実情なのだ。しかも、この状況を見る限り、今のアークロイヤルの力量では苦戦を強いられると予想される作戦に対してさえも自ら積極的に志願して参加しているようだ。そこでリットリオはこう聞く。

「あなた、かなり無理をしませんか？　ここではまだ新人なんだからすぐに実績を出そうなんて思わなくてもいいんですよ？」

ところが、アークロイヤルの答えはこうだ。

「別に実績を出そうと思つてる訳じゃ無い。私は少しでも早くまともな戦力になりたいんだ。そうするにはどんどん実戦をこなすのが一番だ」

リットリオは思わず呆れてしまう。その考え方はあまりに猪突猛進的なのではないか。確かに実戦に参加する事が練度を向上させる上で効果的なのは否定しない。だが演習ならいざ知らず、実戦の場合には常に死者が出る事が前提になる訳であつて、相手は手加減なんてし

てくれないのだ。最悪の場合、沈んでしまう事だつてありえるし、そんな事になれば戦力になるならない以前の話という事になる。

「まさか提督はあなたが志願した作戦全部にゴーサイン出してるんですか!？」

作戦を指示する側が新人をポンポンと戦場に放り込むような真似をしていたとしたら大問題だ。しかし、アークロイヤルは

「さすがにそれは無いよ」

と、苦笑いする。リットリオがその言葉にホツとしたのもつかの間、

「アドマイラルは私の申請をほとんど却下してしまうからね。今回は運よく許可を出してくれたんだ。もう少し柔軟に対応してくれても良さそうなものなんだがなあ……」

と、アークロイヤルが言ったので心が凍りつく。元々この提督の戦場における目は確かなものがあり、無謀な作戦を安易に敢行してしまふタイプでは無い。「柔軟に対応しろ」とは言うが、そんな事は既に十分やっていると言うのが提督側の認識だろう。単にアークロイヤルの喪失に繋がると判断せざるを得ないから、これ以上は出撃許可も出しようが無いというだけの話なのだ。

提督がきちんとブレーキ役を務めてくれてるのが分かったのはそれはそれで良い。だが、ここで把握しておかなければならないのは何故アークロイヤルが自身の実戦能力の向上にここまでがむしやらに取り組んでいるのかという点だ。

「あなたがそんなに急いでいる理由が分からないんですよねえ。無理をして欲しいなんて誰も思つて無いんですよ？　いつか取り返しのつかない事故を起こすんじゃないか心配で……」

「お前は私の事を心配してくれているのか？」

「当然でしょう？　それは多分みんな同じじゃないかしら」

「ビスマルクは、どうなんだろうな……」

「うん？」

いきなりビスマルクの名前が出て来て戸惑う。とはいえ出撃していない時のアークロイヤルがしょっちゅう追いかけている相手だけか

らその反応は気になるものなのかもしれない。

「そうですね、あの子も心配してるかもしれないですね」

実際には、最近のビスマルクはアークロイヤルに追いかけて回されているせいで疲れを溜め込んでいるような所があり、無理な出撃を繰り返しているアークロイヤルの事をどう思っているのかは分からないのだが、とりあえずそう言うっておくことにする。

「それにしても、随分ビスマルクにこだわるんですね、あなたは」

「当然だな。私にとってはビスマルクに関する事が一番の重要事だからな」

リットリオは固まってしまう。あっさりと言つてのけたが、実はアークロイヤルは今とんでもない発言をしたのではないか。そんな風を感じたリットリオが、

「あの、念の為に確認しておきたいんですけど、もしかしてあなたってビスマルクと単に仲直りしたいだけとかそういうんじゃないかな……もつとその先の、その……」

と、恐る恐る尋ねてみると、ほんの少しばかり頬を赤らめて照れ臭そうに頷くアークロイヤル。

(ええっ!? そういう事だったの?)

務めて態度に出さないようにしているが、リットリオの心の中には驚きが渦巻いていた。アークロイヤルのビスマルクに対する気持ちはLIKEではあるんだろうとは思っていたが、まさかLOVEであったとは。もちろん、鎮守府は女性ばかりの職場というのもあってか同性のカップルというのも別に珍しいものではないのだが、アークロイヤルがビスマルクに恋をしているとは思わなかった。何しろ前世では全力の殺し合いをしていた間柄なのである。

「でも、確かあなたたちって前の大戦で大喧嘩してたはずですよね? そんな相手が好きなんですか?」

と、リットリオは素朴な疑問をぶつける。アークロイヤルは苦笑しつつ、

「まあ、普通はそう思うだろうな。だが、あの時の私達が大人気なかったってのもあってね」

といつてから、こう続けた。

「そんな大人気ない私達を相手にあいつは最後の最後まで全力で戦ってくれたんだ。本当、格好良かったよ」

懐かしさと憧れとが同居したようなその表情を見る限り、嫌味や皮肉ではなく、本気でそう思っているようだ。

「いよいよ私が沈むってなった時にね、『ああ、結局自分もダメか』なんて考えてたんだが、その時思い浮かんだのがビスマルクの事だったんだ。あんな勇敢なヤツと一緒に戦ってみたかったなって、そう思ってたんだよ。もちろん、国同士が交戦中だったからそんな願いが叶うはずも無かったんだが」

リットリオは無言でアークロイヤルの独白を聞いている。

「で、今こうやって人間の肉体を得て、ここへ配属されたら……あいつがいるんだよ！ ビスマルクが！ こんなに嬉しかった事は無かつたな！ だってそうだろう!? もう一度会いたいってずっと思ってたヤツに本当に会えたんだぞ!? しかももうお互い交戦中でもないんだ。堂々と一緒に居ていいんだからな！」

いつにもなく目を輝かせて心底嬉しそうに語るアークロイヤル。流石にここまでくればリットリオも共感しない訳にはいかない。

「数十年越しの恋、ですもんねえ」

「ふふ、そうだな」

心なしかうつとりとしているアークロイヤル、こんな彼女の表情はなかなかお目にかかれないだろう。だが、次の瞬間、その表情には陰が差していた。

「だがな、あいつは私を避けるし、作戦海域が違うから戦闘で組むことも無いんだ」

「そうだったんですか？ 海域が違うのは提督の意向？」

「恐らくそうだろうな。前に『ビスマルクと同じ艦隊で仕事をさせて欲しい』と頼んだんだが、練度が違い過ぎるから無理だと言われてしまつてね……」

そう寂しそうに言ってからこう続けた。

「ビスマルクと練度が違うせいでビスマルクの隣に並べないなら、ビ

スマルクと同じ程度の練度を身につけるしか無いじゃないか。だから私はこうしているんだ」

アークロイヤルが異常とも言える程出撃を繰り返したがる理由が判明した。それはビスマルクに対する熱すぎる情熱ゆえ、なのである。

確かにビスマルクはこの鎮守府の主力と見なされている存在であり、重要な作戦を任せられることも多い。今のアークロイヤルの力量だと足手まといになる可能性が高いだろう。だが、リットリオが推測するに、練度の違いというのは恐らく根本的にはただの建前だ。ビスマルクとアークロイヤルの現在の関係は提督も把握していて、この二人を同じ艦隊に配属させたらその艦隊が機能不全に陥るのではないかと懸念しているのだろう。

もしかしたら、アークロイヤルもそんな提督の意図には薄々感づいていて、ならば建前が通用しない状況を作ってやろうとムキになっている部分があるからこそ今の状況があるのかもしれない。

「休んだほうがいい、とは提督は言わないのかしら？」

「いや、言っているよ。だけどそんなものの必要性は感じていないからこつちからはそう伝えているがな」

「そうなのね……」

これは不味いかも、とリットリオは思った。この状態が続けば、近い将来、ビスマルクとアークロイヤルをそれぞれ別々の艦隊で活動させるべく新しい名分を用意する必要があるが、アークロイヤルの性格を鑑みるに、その時になって、はい、そうですか、と引き下がる姿は想像出来ない。練度の向上そのものは艦娘とて軍人である以上、むしろ奨励すべき事であって、提督にしても止める理由は無い。ひよつとすると、提督は早くもアークロイヤルの扱い方に困り始めているというのが実情なのではないだろうか。最悪、戦力として重要なビスマルクを情緒不安定等を理由に一旦第一線から退かせるという決断を下す必要も出てくる事になるかもしれない。

そうなる前に、ビスマルクとアークロイヤルの関係を改善させる必要があるし、その為には第三者の立場からも手を打たなければならな

いだろう。特に優先して対処しなければならぬのはビスマルクを
想うあまり半ば暴走状態に陥ってしまっているアークロイヤルだ。

「そういえば、あなたは珍しい艦載機を使っていますよね？」

「ああ、ソードフィッシュのことか？」

そう言つてアークロイヤルはソードフィッシュを取り出して見せ
る。大切な機体のはずだが、わざわざリットリオの手に持たせてくれ
た。

「複葉機、なんですね」

「ああ、旧式でろくにスピードも出ないがとにかく頑丈で格闘戦以外
なら何でもこなせる器用な奴だ」

現代の軍用機でこの機体に近い設計思想の物を探すのは中々難し
いが、あえて似ている機体を探すとすると、飛行性能上のピーク値を
追求するのではなく、まずは取り回しの良さや安定した操縦性、そし
て多用途性に優先的に性能を振っているというあたりはF/A-1
8ホーネットやJAS39グリペンに近いものがあるかもしれない。
しかも、スピードが出ないと言つてもそれは他の航空機と比べた場合
の話であつて、船を相手にするのであれば十二分に高速だ。先ほども
書いたように、アークロイヤルに関して、この鎮守府に所属している
艦娘の間では頼もしさと不安が相半ばしている状態だ。しかし、一旦
戦場に出てしまえばこのような機体を自身の分身のように使いこな
すアークロイヤルは確かに頼れる存在に映る事だろう。実際、無理を
しているのではないか、という状況にあつても戦果そのものはきちん
と出しているのである。それも、夜間も含めて。このような芸当は
アークロイヤルとソードフィッシュの組合せだからこそ出来る事だ
と言える。

「夜戦もこれで？」

「ああ、そいつは戦場は選ばないからな」

「へえ……」

戦闘機や攻撃機の主力がジェット機の時代になつても、夜間戦闘能
力や全天候能力といった機能がごく普通に備えられるようになるの
は1960年代以降だから、その点でも中々侮れない機体なのであ

る。それに、兵器というのは信頼性が何よりも物を言うケースが多い訳で、頑丈さが売りのソードフィッシュが高い評価を得ているのはそういう側面もあると言って良いだろう。そんなアークロイヤル自慢の機体に感心しつつ、リットリオはこの機体が最近よろしくない使われ方をされている事も忘れていない。

「確かにこの子はいいい子だと思います。でも、味方を追いかける為に使ってしまうのは違うと思うんですね」

そうアークロイヤルに語りかける。

「あなただってわかりませんか？ ビスマルクは怖がつてるんですよ？ なのにあなたはこの子を使って毎日のように追いかけているじゃないですか。それにこう言っては何ですけどビスマルクはこの子のせいで沈められたっていう嫌な思い出があるんです。今のままじゃあの子は疲れ切ってしまいますし、それは流石に良くないと思います」

と、ソードフィッシュを眺めながらリットリオは言うのだが、突然、「……貴様は一体ビスマルクの何なんだ？」

と、そう言われてしまった。

何でそんな変な事をいきなり聞いてくるのかと思ったりリットリオはアークロイヤルと視線を合わせて内心ギョツとした。先程までと異なりアークロイヤルの目には自分に対する明確な敵意が込められていたからである。どうやらアークロイヤルの中では自分が恋敵の扱いにされかけているようなのだが、それが確定してしまって彼女に心を閉ざされるとその行動を是正させようとするリットリオの説得は一切受け付けてくれなくなるだろうから、

「別にあの子とは特別な関係って訳じゃないんです。ただ、私がこの鎮守府に配属されてからずっとお世話になってるから、この先もあの調子なのは心配だし、困るんですよ」

と、答えるしかない。

「ふうん……」

と、アークロイヤルは一言発しただけだ。一応、リットリオの説明には納得してくれたようだが、どことなく面白くなさそうな様子だ。

存外嫉妬深いのかも知れない。

「この子を使つてまでビスマルクを追いかける必要は無いと思うんですよねえ……。普通に話しかけるだけじゃダメなんでしょうか？」

何となく虫の居場所が悪そうなアークロイヤルは、

「普通に話しかけたって無駄じゃないか。どっちにしろあいつは私と距離を置きたがるんだ。だったら少し強引に距離を詰めるぐらいはやつても良いだろう？」

と、ふてくされたようにいう。

「はあ……。あのねえ、アークロイヤル。今のあなたは前にビスマルクが一回死んだ時の行動をそのままトレースしてるんですよ？ あの子が怖がるのは当然だと思いますか？」

リットリオがはつきり言うアークロイヤルは気まずそうな顔をして、

「アドマイラルにもウォースパイトにも同じ事を言われたよ」

と言った。

流石に上官も同僚も今の状況を見かねたのだろう。既に注意を受けていたようだ。

「周りから見てもそうなんですよ？ あなただつて……」

そうリットリオが言いかけた途端、

「そんな事は分かっている！」

と、突然アークロイヤルが強い口調で言ったのでリットリオは驚いてしまった。分かっているなら何故、と聞きたくなかったが、

「そう、分かっている。分かっているんだ……」

うつむいて苦しげにそう呟くアークロイヤルの姿を見て、もはやリットリオはその場ではそれ以上何も言えなくなってしまった。

アークロイヤルをどうしても突き動かしてしまう何かがある。とありあえず、今はそれが分かっただけでよしとしなければならぬだろう。その何かが一体何なのかという所まではここで確認出来そうな状況ではなかったのである。

この鎮守府では定期的に全体での会議を行う事になっている。原

則として鎮守府に所属している艦娘は全員出席する事になっており、参加人数は決して少なくないのだが、基本的には提督や、各種任務や業務に従事している艦娘からの連絡事項を伝えた後は、簡単な質疑応答があるだけで、普段はそれほど時間がかかるものではない。

会議の開始時間が近づいてきており、徐々に会場には人が集まり始めている。

そんな全体会議の場でアークロイヤルはかなり後方の席に既に着席していて、その位置よりやや後ろの、ある程度離れた席からリットリオはアークロイヤルを観察し続けている。視線をあちこちに向けているのはある人物を探しているからだろう。そしてお目当の人物であるビスマルクも入室してきた。どうやら会場の前方の席に座るつもりのようなだ。ビスマルクの姿を目にした途端、普段ならば無機質な印象さえ与えるその表情がふわりと和らいだ。

(ホント、恋する乙女って感じね……)

アークロイヤルにとってはビスマルクはまさに運命の人と呼ぶべき存在なのかもしれない。が、そうだとすればいかにもその行動との辻褄が合わない。あれをどう解釈するべきか。リットリオは内心首をひねっている。

そんな事を考えていると、突然アークロイヤルの表情が曇った。彼女の視線の先にはいるはずのビスマルクの方へとリットリオも視線を向けてみる。ある一人の艦娘が隣席しているビスマルクと親しげに話している。

(ああ、そう言えばあの子はビスマルクと仲が良かったわね)

そう思つて、再びアークロイヤルの方へと視線を戻してみると、明らかに先ほどの彼女とは様子が異なり、フラフラと視線が泳いでいる。まるでビスマルクを見ようとしても、見ることができずに視線を背けていると言った感じである。心なしか表情そのものも険しい。そんな彼女の様子を見ていてリットリオはハツとした。

(これはもしかして……)

いや、恐らくは間違いない、とリットリオは思った。アークロイヤルは焦っている。それは何故か。ビスマルクは既に他の女の物に

なっているのではないか、あるいは現在進行形で言い寄っている女がいるのではないか、そういう不安があるのだろう。ビスマルクはこの鎮守府に配属されて長いし、他の艦娘達からの信頼も厚く、交友関係も広い。そのうちの誰かと恋仲になっても不思議ではないが、その一方でアークロイヤルはと言えば着任してまだ日が浅い。恋愛を競争と考えれば、アークロイヤルは出遅れているどころか、圧倒的な最後発の立場にいるのだ。先日、説得を試みた時にはリットリオに対してさえ嫉妬心を露わにした。恐らくはアークロイヤルが内面に秘めている感情はそれほど強烈なのだ。その感情が不安をも生み出しているのである。ビスマルクはアークロイヤルとその行動に怯えているが、実際にはアークロイヤルにも怯えがあると云う事になる。ただしやろうと思えば物理的に対処が可能なビスマルクの怯えと違い、アークロイヤルのそれは自身の内部から湧き上がり続けているものであつて、本質的に避けようがない。自分でもコントロールしきれないそれをどうにか処理しようとしたからこそ一足飛びにビスマルクに迫ると言う極端なアプローチをとってしまったているのかもしれない。

「これ、どうにかなるのかしら……」

さすがにリットリオも頭を抱えなくなるような気分と共にそう呟いてしまった。とは言えどうにかしなければならぬが、さてどうするか、と考えているうちに、提督が秘書艦とともに入室して来て会議の開会を宣言したから、一旦その事に関してはとりあえず脇に置いて会議の内容に集中すべく思考を切り替える事にした。

会議があつた日から数日が経った。

「それで、そのワインが美味しくてですねえ。作っているのは特に有名な所って訳じゃ無いんですけど、これは当たり前だと思ってしまいましたね」

「へえ、私も飲んでみたいわね」

リットリオとビスマルクがそんな話をしながら鎮守府内の敷地を歩いていた。相変わらず雲は多いが、雨が降りそうな感じではなく、

散歩をしていても気分が良い。

「ぜひぜひ、飲んでみて下さい。本当に美味しいんですから。ただ、その美味しいって言うのが結構悩む所だったりするんですけど」

「うーんと、それは飲みすぎちゃうからって事？」

「まさにその通りなんです！ あんまり飲むと次の日にもお酒が残るから仕事に差し支えるじゃないですか。それにお酒って飲みすぎると眠りが浅くなるって聞きますし……」

「ああ、それは正しいそうよ。お酒って飲んだ瞬間は眠くなったりするじゃない？ だけど脳を覚醒させる作用もあるらしいわ。だから結局睡眠にも悪影響が……」

ビスマルクの説明がいきなり止まった。リットリオが何事かとビスマルクを見ると、彼女の視線はリットリオとは別の方角に向けられており、その方角には広場に設置された長椅子に座ったアークロイヤルの姿があった。

「アークロイヤルですねえ。座ったままでどうしたんでしょう？」

「……いきなり私の方へ向かってきたりしないわよね？」

最近のビスマルクはアークロイヤルに対して恐怖症のような状態になりつつある。

「おそらくそれはないんじゃないかと思えますけど……。でも、あの子様子が変です。全然動きませんよ？」

「何かしら？ じっとしちゃうようなタイプにも見えないけれど」

「ちよつと近づいて見てみませんか？」

「ええっ!? そ、それはどうなのかしら……」

「大丈夫ですよ。何かあったら私がアークロイヤルを押さえておいてあげますから」

「そ、そう？」

そんな会話をしながら、二人はアークロイヤルの方へと恐る恐る近づいて行き、すぐ近くまで来て彼女の様子を伺う。

「寝てますね……」

「ええ……」

アークロイヤルは椅子に座ったまま居眠りをしていた。彼女は鎮

守府のメンバーの中でも比較的アクティブなタイプという印象がある為、観察している二人にしてみれば非常に珍しいシーンに遭遇しているという思いがある。

ビスマルクはすうすうと寝息を立てているアークロイヤルの顔を覗き込んでみる。一見すると端正で、それでいてどこか愛嬌のある彼女の顔を見ながら、

(こうして見てると可愛いんだけどな……)

と、ビスマルクが思った次の瞬間、アークロイヤルの瞼が鈍く開いた。

一瞬、アークロイヤルは自分の周囲がどうなっているのかわからなかったようだ。ところが、いざ眠りから覚めたら自分の目の前にはビスマルクとリットリオがいて、しかもリットリオはともかくビスマルクの方はアークロイヤルが今このタイミングで目が醒めるとは考えていなかった為、結局両方が驚いてしまい、

「うわあああっ!!」

と、鎮守府内に二人の叫び声が響き渡る結果となってしまった。

「ああ、寝てしまっていたのか……迂闊だった」

自分の顔をなでつつ、恥ずかしそうにそう言うアークロイヤル。別にビスマルクとしてもしよっちゅう逃げ回るつもりはなく、自身を追いかける時の気迫のようなものが今回ばかりは全く感じられない為、その場に留まってアークロイヤルの話を聞いている。

「それにしても珍しいですねえ。あなたがこんな所で居眠りだなんて」

そうリットリオが聞くと、

「一気に疲れが出たんだらうな。今日は暖かいし、座って海を眺めていたら、つい、な」

アークロイヤルはそう言う。

「だから言ってるでしょう。出撃の頻度を減らしなさいって」

そんなリットリオの警告に対して、

「ああ、だから実際に減らす事になった。と言うより、しばらく私の出撃は無いよ」

と答えたものだから二人は驚いてしまう。

「それは提督の指示？」

「そういう事」

そう答えるアークロイヤルの表情は不満そうだ。二人は彼女の隣に座って詳しく話を聞く事にした。

執務室へ呼び出しを受けたのだという。そこで示されたのがここ最近のアークロイヤルの戦闘に関するデータだ。ほぼ同じ練度の他の艦娘と比べると、一定の成果を上げる為に使用する燃料弾薬その他資材の消費量が明らかに多いのだ。前々からそうだというのであれば資質的にそういうタイプなのだろうという話にもなるのだが、以前のデータではそれ程資材の消費量が多いという事は無かったのだという。それがここ最近になって急激に消費量が増えてきているというのだから、これはもう以前のアークロイヤルと異なり、戦闘時の行動の効率が悪化していると考えざるを得ない。そしてその原因は何かと言われれば、やはりそれは連日の出撃による疲労の蓄積と結論づける以外に無いだろう。これではアークロイヤルの体調も心配になるし、何より彼女が消費する資材を他に回した方が予算管理の側面からも良い。

『資材はタダじゃないのに、最近は無駄遣いが過ぎる』なんて言われてしまつてはね……」

諦めたような表情でそう言う。見方を変えれば、これは出撃を続けたがるアークロイヤルをいよいよ提督が容認しきれなくなったということでもあるだろう。元々提督は無理を重ねるアークロイヤルに危なっかしさを感じていた節があり、それとなく自制を促していたのだが、それをアークロイヤル側が一顧だにして来なかったのである。その為、それまでの出撃データを基にアークロイヤルに反論を許さないだけの十分な資料を作成した上でそれを彼女に示したのだろう。流石のアークロイヤルも具体的な数字を根拠に出撃する事自体に問題があると指摘されてしまえばそれは引き下がらざるを得まい。しばらくは休暇の扱いになるのだという。

「へえ、話には聞いてたけどあなたってそんな無茶してたのね」

ビスマルクが呆れながら言う。

「自分ではそこまでだったつもりは無かったんだがな。外から見るとそうなってしまみたいだ」

アークロイヤルはそう言いながら、ふと思いついたようにビスマルクを見つめる。

「……何？」

ビスマルクが怪訝そうな顔つきで言う。

「いや、お前がまともに話しかけてくれたのは初めてだと思っただとね」

と、嬉しそうに言うアークロイヤル。

「それはあなたがいきなり追いかけてくるからでしょう？」

「追いかけるのはお前が逃げるからだ」

何やら水掛け論になりそうな雰囲気だったのでリットリオが制止に入る。

「はいはい、今は喧嘩をするのはやめてくださいね」

「なにも喧嘩をしているわけでは……」

「ええ、でもアークロイヤルはビスマルクとお友達になりたいんですよね？　ちゃんと会話が出来る機会を得られたんですからまずはその事を伝えるべきだと思いますよ」

「うっ」とだけ言ってその後の言葉が続かず、気まずそうな表情のアークロイヤルと、驚いたような表情のビスマルク。

「ビスマルク。わかってているのかもしれませんがアークロイヤルはあなたに迷惑をかけたいわけじゃないんです。ただ、仲良くしたいって、それだけなんですよ」

と、リットリオが言うと、

「そうだとすると、私を爆撃しようとするのはおかしいんじゃないかしら？」

と、ビスマルクが当然の事を指摘する。

「直接危害を加えるつもりは無かったんだが……その、それに関しては悪かったよ」

「ビスマルクはソードフィッシュに攻撃を受けた事が辛い思い出なんですよ？？」

そうリットリオが補足すると、

「ええ、そうね」

と、ビスマルクが同意する。

「だろう、な……」

アークロイヤルが寂しそうに呟いた。実際に相手がすぐそばにいるから却って負い目を感じているのかもしれない。そんな彼女に視線を投げかけていたビスマルクは、しばらくして何を思ったのか、

「私を爆撃したあの子を見せてくれないかしら」

とアークロイヤルに聞いてきた。アークロイヤルは一瞬驚いてから、すぐに一機のソードフィッシュを取り出して、ビスマルクに手渡す。

「こうやって間近で見るのは初めてだわ。そう、この子なのね」

「結構、可愛い子ですよ」

と、リットリオが言うが、

「それでも、この子に飛ばれるとまだ怖いわね……」

とビスマルクは呟く。どれだけソードフィッシュによって心に深い傷を負わされたのか、その事がアークロイヤルにも伝わってくる。

「あの時、こいつに攻撃を行わせたのはあくまで私だ。私のことを責めるのは良いが、こいつに責任は無い」

と、アークロイヤルは言う。彼女の言う「あの時」とは最近頻繁に発生している鎮守府内での追いかっこの事ではなく、かつての大戦時においてビスマルクを追撃した時のことを指している。その上でアークロイヤルはビスマルクに対して自分の考えている事を出来る限り正確に打ち明ける。

「確かにあの時、私はお前を酷い目に合わせてしまった。でも、その事を謝るつもりは無い。と言うより、それは出来ない」

アークロイヤルがそう言うのは当然だろう、彼女だつてあくまで祖国の命令の下で全力で戦っただけなのだ。

「忘れて欲しいなんて言うつもりも無い。都合の良い事を言っているのはわかっているんだ。それでも、私は……」

そう懸命に語りかけてくるアークロイヤルをビスマルクは無言の

まま見つめていたが、しばらくして、

「いいわ、今の所は無しにしてあげる」

と言った。アークロイヤルがホツとしたような表情をする。

「ただし」

ビスマルクが条件を付ける。自らが持っているソードフィッシュを指差し、言った。

「この子を私に向けて飛ばさない。それを守ってほしいわ」

「わかったよ」

アークロイヤルは即座に了承する。

「仲直りつてことで良いんでしようか？」

リットリオが二人を交互に見ながら言う。

「うーん、そうなるのかしら」

腕組みをしてそう言うビスマルク。ホツとした表情のリットリオは立ち上がって言う。

「だったらご飯食べに行きましょうよ！ もうお昼ですし、すっかりお腹空いちゃいました」

「そうね」

ビスマルクも腕組みを解いて同意した。

結局、ビスマルク、アークロイヤル、リットリオの三人で鎮守府の外にあるレストランで昼食をとる事になった。アークロイヤルもリットリオもどちらかといえば大食らいなタイプで、ビスマルクだってそこそこ食べる方ではあるはずなもの、この二人程では無いという事もあって、二人の食べっぷりに半ば感心し、半ば呆れていたのだが、自分自身も以前程ではないにせよ大分食欲が戻ってきたのを実感していて、久しぶりに美味しい食事が取れた事に安堵していた。

その後、程無くしてビスマルク達に哨戒及び敵戦力掃討を実施するようにとの命令が下った。

今回の任務にあたっては火力の高い艦を中心にした編成が生まれ、ビスマルクが旗艦、2番艦がリットリオである。なお、アークロイヤルは今回の出撃にあたって見送りに来ていたのだが、前述通り上から

の指示があるために出撃そのものは叶わない。

「無事に、帰って来てくれよ」

「当然よ」

ビスマルクはそう言うが、アークロイヤルはとても寂しそうだ。

だいぶ離れてから再度振り向くと、まだアークロイヤルはこちらを見送っていた。

鎮守府が水平線の向こうに隠れた頃、ビスマルクがリットリオにこう言った。

「なんか変わってるわね、あの子」

「そうですか?」

「出撃なんてしよっちゆうなのに、あんなに名残惜しそうにしないで……そんなに自分が出撃出来ないのが嫌なのかしら?」

「うーん、その回答だと100点満点中20点、と言った所でしょうか。あなたのことが心配なのと、出来れば一緒に出撃したかったってのがあれば及第点だったんですけど」

「何それ? やっぱりあの子変わってるわ……」

「変わってるんじゃないんですよ。純粹にあなたの事が好きなんだからああもなるでしょう?」

「……は?」

ビスマルクは目を丸くしてリットリオを見る。

「あの子が? 私を? え?」

明らかに混乱している。そんな事想像したこともなかったのだらう。

「それって本当? 冗談よね?」

「本当ですよ。本人に直接聞いたんだからこれ程確かな事は無いです。あなたって女の子同士はダメなタイプ?」

「いえ、そんな事は……無いつもり、だけど……」

戸惑いを見せるビスマルク。

「でも、よりによって何で私なのかしら?」

「なんでも、以前あなたと戦った時に、その姿に惚れちゃったんだとか」

「何よそれ。そんな事で誰かを好きになつたりなんて普通しないでしように……」

ビスマルクは呆れながら言う。

「誰かを好きになるきつかけなんて人それぞれじゃないですか？」

アークロイヤルの気持ちをリットリオから聞かされて驚いてしまったが、同時にアークロイヤルについての幾つかの疑問も解消された気がする。まず、自分ばかりをやたらと追いかけてまわすというのもそうなのだが、その際、グラーフ・ツエッペリンにガードして貰う等してアークロイヤルが退散せざるを得なくなる時、悔しいというよりもとても悲しそうな表情を浮かべている事が多かったのだ。その時は何でそんな複雑な表情をするのか全くわからなかったが、彼女がそういう気持ちでいたのなら何となく納得出来そうではある。

とはいえ、納得したところでビスマルクが悩む事には変わりはない。元々接し方がわからない相手なのに、その相手が自分に恋愛感情を抱いているとなればますますわからなくなる。今までと違って距離を置いておけば良い状態でなくなった分状況は悪化しているとも言えた。

「あの子とどう接すればいいのかしら……」

ビスマルクは素直な心情を吐き出す。

「変に身構えないで普通に應對してあげればいいのでは？ どうせ今まで避けてばかりだったじゃないですか」

リットリオのこの返答は一般論としては正しいのだろうが、今回はかりはドライ過ぎたかもしれない。

「それはそうだけど……」

そう言つてビスマルクは溜め息をつく。

「何かあれば、私も話を聞くぐらいは出来ますから」

と、穏やかな表情で言うので、ビスマルクも、

「ええ、ありがとう」

とだけ返した。

先日、アークロイヤルと会話をした時、リットリオは「アークロイヤルはビスマルクと友達になりたがっている」と言つていた。しか

し、ここに来て、リットリオはアークロイヤルが自分に対して好意を抱いているという情報を追加で出して来たのである。追いかけて回されるような事は無くなっている訳だから、かねてからビスマルクの事を心配していたリットリオにしてみれば一安心という事なのだろうし、今後のことを考えればアークロイヤルの気持ちについてはビスマルクにも知っておいて貰う必要はあると判断したものの、さらにそれ以上口出しするのはおせっかいに当たると考えているのかもしれない、そうであればもうここから先の事は自分の判断でやってくれと思っているのだろう。

結局、この日の作戦行動でも深海棲艦に遭遇したが、あっさりと撃破した。とは言え、ビスマルクにとっては敵に遭遇した事自体は些細な事で、それ以上の大問題を抱えることになった訳だから、作戦行動中について晴れた表情を見せる事は無かった。

帰投した時、無事な姿を見てアークロイヤルが大喜びで出迎えてくれたが、彼女の気持ちを知ってしまったビスマルクは微妙な笑顔を返すのが精一杯だった。

「ほら、あっちだー！」

「ええ、わかったわ……」

街なかをアークロイヤルに腕を引っ張られる形でビスマルクが続く。今日は二人が仲直りしてからの何回目かの、一応はデートの日だ。一応は、という言葉をつけ加えたのは、アークロイヤルからすれば確かにそういう事になるのであるが、ビスマルクからすればどうしてもただの友人同士のお出かけとしか受け止められないからである。

アークロイヤルが自分に好意を持っている。というのはあくまでリットリオから聞かされているだけの話で、その実アークロイヤル自身から直接聞かされた訳では無い。ビスマルク自身、恋愛の機微については非常に疎い所があり、アークロイヤルが本当に自分を好きなのかどうかの見極めがつけられないでいるという状況なのだ。それに、機会はいくらでもあったはずなのに、アークロイヤルがその手の話題を全くしようにしないのも気がかりな点だ。

加えて、自分自身がアークロイヤルの事をどう思っているのかわからず、仮に気持ちを打ち明けられたとしても果たしてそれに応えられるのか、というのもある。直接本人に聞くという手段が取れないのもそういう心理から来ている。これがエゴだというのでも自分では分かっているのだが、やはりアークロイヤルに傷ついて欲しくは無いというのもビスマルクの正直な気持ちだからだ。

「出撃制限が解除になったそうね？」

「ああ、これでまた存分に戦えるよ」

実に楽しそうに言うアークロイヤル。

「ダメよ、また無理な出撃を繰り返したりしたら」

「分かっている。また無理やり長期休暇を取らされたら堪らないからな」

本当に分かっているのか、と思わずビスマルクは苦笑いをする。

こうやってアークロイヤルと過ごす時間は素直に楽しいし、自分といる時にはしゃいだりする彼女はとても愛らしく思える。が、これは果たして恋愛感情がもたらす物なのか。アークロイヤルには悪いかもしれないがビスマルクには自分の気持ちと向き合う時間がもう少し欲しいと感じている。

「ああ、このあたりにクレープ屋があつてな。そこが結構美味しいんだ」

と、アークロイヤルが言う。結構色々と見て回るのも好きなタイプのようなのだ。

「へえ、あなたのオススメのメニューとかはあるの？」

この子がそう言うのなら、とビスマルクも関心を示す。

「当然。何ならお前の分も買ってこようか？」

「ええ、お願いするわ」

そう言った途端、アークロイヤルはお店へと小走りで向かって行った。何だかいつもよりテンションが高いのではないかというような気がして苦笑いしてしまうが、そんな彼女の事を可愛いなあと思ってしまうのも事実であった。さて、自分はどうするべきだろう、などと考えていた所、横から声をかけられた。

そこにいたのは鎮守府でよく話す艦娘の一人で、たまたま買い物で街へ出ていてビスマルク達を見つけたのだという。つついっいビスマルクはその艦娘との雑談に興じてしまった。

(そろそろ言わなきゃダメなんだがな……)

アークロイヤルはクレープを両手で持ちつつそんな事を考えていた。自分の気持ちをビスマルクに伝えるかどうかという事である。実はリットリオ経由でビスマルクが自分の想いについて既に伝えられている事を彼女は知らない。だが、仮にそんな事を知らされたとしても却って気まづくなるだけだろう。ビスマルクが身近な存在になつた分、拒絶される可能性を想像すると怖くなってしまって、自分の感情に関する部分は何も言い出せなくなってしまうのがアークロイヤルの現状なのだ。

(一緒にいてくれるだけでも、それでいいのかもなあ……)

などと考え、自分はこんな事を考えてしまう弱気な奴だったかとも思つてため息をつく。初めて出撃禁止の指示を受けてしまった以来、一緒に時間を過ごす機会も増えていて、身近に居るからこそビスマルクの新たな一面を発見する事も多くなつた。そしてビスマルクのそんな面を見るたびに、やっぱりこいつって良いな、という思いが強くなっている。

何よりも、どういう訳か甘えなくなるような雰囲気を感じさせ、本人も意外と人懐っこいような所があるのも魅力的だ。まあ、他の艦娘に対しても似たような態度を取っているのが癪ではあるのだが。ただ、一緒にいる事自体がとて心地の良い存在である事は確かで、アークロイヤルにしてみればビスマルクとはもう二度と離れたくない、だからと言ってその本心は出来れば知りたく無いという微妙な心理に至っていた。

そうこうしている内にビスマルクの姿が見える場所まで戻つて来たが、どういう訳か彼女は自分ではない艦娘と親しげに話していた。それを見た瞬間、アークロイヤルの中に黒い感情が沸き起こる。

(なんだ、そんな女と仲良くしゃがって……今は私と過ごす時間じゃなかったのか)

自分には見せた事の無いような笑顔で話しているビスマルク。イライラに殺意が混ざり出す。ビスマルクが相手に冗談を言ったように、相手の艦娘が笑いながら、変な事言わないでよ、とツツコミにペチンとビスマルクをはたいて見せた瞬間、アークロイヤルの中で何かがプツンと切れた。

「おい、貴様。ビスマルクから離れろ！」

そう叫んでクレープを投げ捨て、ソードフィッシュを取り出してビスマルク達に向かって放ったのである。

聞き慣れたプロペラ音が聞こえてビスマルクはゾツとする、音のする方向を見ればアークロイヤルから放たれたソードフィッシュがこちらへ飛んで来ていた。

「あなたは逃げなさいっ!!」

ビスマルクは隣にいた艦娘に向かって叫ぶと、彼女は青い顔をしたまま頷いてそのまま走り去った。そしてビスマルク自身はソードフィッシュの目標はあくまで自分のはずだと判断して、いずれは来るであろうアークロイヤルを待ち構える。

「全く油断も隙も無い……」

そう言って近寄って来るアークロイヤル。逃げた艦娘を目で追っている。

「すまん、慌てていてクレープを落としてしまったよ。もう一度買ってくるから悪いがもう少しだけ待っていてくれ」

アークロイヤルはそう言うがビスマルクからの反応は無い。

「……ビスマルク？」

相手の異常を察したアークロイヤルは声をかける。

「アークロイヤルさあ……」

ビスマルクの妙に低い声と、暗い表情。そんな彼女を見てアークロイヤルはゾクリとする。

「……あなた、なんで飛ばしてるの？」

「え？……あっ！」

ようやくアークロイヤルは自分のやってしまった事に気が付いた。それまでの手癖が出てしまい、無意識のうちにビスマルクに向かって

ソードフィッシュを放っていたのだ。

「ねえ、私、言ったよね？ 『この子を私に向かって飛ばすな』って、そう、言ったよね？」

そう言うビスマルクの周りをソードフィッシュが周回していて、実際にはそんな事は無いだろうが、アークロイヤルさえ攻撃命令を出せば即座にビスマルクに対して爆撃が行われるはずだ。

流石にビスマルクはすぐに逃げ出すなどという事はしなくなっていたが、腕組みをして立ったまま小刻みに震えていた。その震えはこれまでの経緯を踏まえると恐怖感から来ていると推測されるが、果たして本当にそれだけだろうか。

その時のビスマルクの顔に浮かんでいたのは凄まじいまでの怒り、そしてその瞳が宿しているのはこれ以上無いという失望。そんな彼女を見てアークロイヤルの全身に冷や汗が流れる。ビスマルクの視線は真っ直ぐに相手を見つめるものではあったが、その性質は極めてネガティブで、相手を精神的に圧迫するものであった。そんな視線を受け止めなければならぬアークロイヤルの心の内はとても苦しく、自分の方が逃げ出してしまいたいという欲求にさえ駆られてしまう。そんな彼女をビスマルクはしばらく見つめていた後、ある一言をアークロイヤルに放ってその場から走り去ってしまった。

「……………この大嘘吐き」

この言葉がアークロイヤルの心にグサリと突き刺さる。ビスマルクの無言の、しかしながら極めて手厳しい糾弾に耐えた末の最後の一言のダメージは大きく、アークロイヤルはしばらく動けなかった。しかし、ビスマルクが逃げだしてしまったのであれば、これからでも何としても追いついて今の行動を弁解しなければならぬ。

「ビスマルクッ……………！ 違うんだっ……………！」

ここで追いつけなければ本当に自分は終わる。そんな思いでアークロイヤルはビスマルクを追いかけ出した。

(何よ、結局約束なんて守らないじゃないっ……………！)

ビスマルクが守るように言った約束はたった一つだけだ。それなのにアークロイヤルはそのたった一つの約束をあつさり破ってし

まった。なまじ彼女との楽しい時間を過ごせるようになった矢先の出来事だった事が災いして、自分への裏切り行為に見えてしまった事もまたビスマルクの怒りを助長していた。

ビスマルクは走りながら慌てて携帯電話を取り出す。前世の頃は主な通信手段といえばモールス符号を使うような無線機で、それも真空管を使った巨大な物であったから、現代ではこんな手のひらに収まるようなもので簡単に他人と音声のやりとりが出来るという事に驚いた記憶がある。それはともかく、ビスマルクの端末にはリットリオの番号も保存されていて、事前に「何かあつたら連絡するように」と言われていたので、今回は素直にその言葉に甘える事にする。

「あら、ビスマルク。どうしたんですか？」

「リットリオッ！ あなのつ、アークロイヤルがつ！」

走りながらなので上手く話す事が出来ない。だがリットリオにはこの言葉だけで十分伝わったようだ。

「……また、なんですかね？」

「そうっ!!」

「分かったわ。あなたは私の部屋の方向へ逃げてください。そうしたら何とか出来ますから。いいですね？」

「ええっ!!」

そう言つてビスマルクは携帯を切り、リットリオの部屋へと進路を定めた。

通話が切れたのを確認したリットリオは

「結局そうなるのね……」

と、端末を見つめながら呟き、

「まあ、そんな気はしていたけれど」

と、穏やかに言いながら立ち上がった。ただしその表情は口角が釣り上がっていてそこだけ見れば笑っているように見えるのに、顔全体を見れば人でも殺すつもりなのではないかと思わせる凄まじいものであった。そして室外からは、パタパタ、と窓ガラスを水滴が叩く音が鳴り出した。元々今日の雲行きは怪しかったが、いよいよ本格的に雨が降り始めたようだ。

(頼む！ もう逃げないでくれ！)

雨が降る中、そんな風に思いながら必死にビスマルクの後ろ姿を追うアークロイヤル。ビスマルクは鎮守府の敷地内のある建物の中に駆け込み、アークロイヤルがそれに続く。

「待つんだ、ビスマルク！ 待ってくれ！」

そう叫んだ時、ビスマルクのさらに向こう側から、

「待つのはあなたの方よ、アークロイヤル！」

という声が聞こえてきた。

リットリオであった。ただしいつもの彼女と異なる点がある。これから出撃する訳でも無いのにもかかわらず、戦闘に使用する艦装を全て身に付けていたのである。

何でそんな格好でいるんだ、と思ってアークロイヤルが思わず立ち止まると、ビスマルクがリットリオの元へと駆け寄る。

走り続けて息が上がっているビスマルクは、リットリオにこんな声をかける。

「ありがとう、助かったわ。でも艦装を全部つけたまま鎮守府内にいちゃだめじゃない」

「そうなんですけどね。このままだとあなたが危ないと思ったものだから……」

そうビスマルクに言うリットリオの眼差しは慈しむかのようにであったが、アークロイヤルの方へと視線を向けた途端、その目つきが今までに見た事の無い物へと変貌し、アークロイヤルの背中を寒いものが駆け抜けた。

「怖かったでしょう？ でも、もう大丈夫ですからね？」

そう言ってビスマルクをそっと抱きしめるリットリオ。

(えっ……?)

一見すると慰めの為の抱擁のようにも見えたが、どうもそれだけとは思えない。リットリオはビスマルクの耳元で何かしらを囁いていて、ビスマルクはそれに小さくうなづいている。それがどんな内容なのかは聞き取れないアークロイヤルの心が嫌な予感で蝕まれ始める。

リットリオはビスマルクの後頭部を優しく撫でながら、

「とにかく、あなたは私の部屋に避難しておいて下さい。これが終わったら私も行きます。そうしたらその時に、ね？」

「言い、ビスマルクの頬に軽く口付ける。」

「なっ……！」

思わずアークロイヤルの口からそんな言葉が飛び出してしまった。そんなアークロイヤルを横目で見ながら、リットリオはニヤリと笑う。

「さあ、行って下さい！」

そう言っリットリオはビスマルクを送り出す。すぐさま、再び走り出したビスマルクはこちらを振り返る事も無く、残された二人の視界から消えてしまう。

「お前、まさか……！」

アークロイヤルはそう言うのが精一杯だ。カタカタと震えているのは疑念、嫉妬、怒りその他諸々の負の感情が渦巻いているせいだろう。

「ふふ、流石にわかったようですね。ご推察通り、私とビスマルクはそういう関係なんです」

「そ、んな……！」

一瞬茫然自失としたものの、何とか意識を立て直したアークロイヤルは、

「貴様、裏切ったのか!? 私のビスマルクに対する気持ちは知っているはずだろう！」

と、リットリオを糾弾するものの、

「何を勘違いしているのかしら？ 私はあなたの味方だったつもりなんて一度も無いんですよ？」

と返されたものだから絶句してしまう。

「ただ、あなたには感謝しなければいけませんね」

「何を、訳の分からない事を……！」

「だってそうでしょう？ 私だって前々からビスマルクの事が好きだったのだもの。でもなかなかきっかけが掴めなかったんですよ……。そんな時にあなたが着任してきたんです」

(やっぱりコイツは最初からビスマルクを……!)

そう思い、リットリオを睨みながらもアークロイヤルは無言のままだ。リットリオは更に続ける。

「あなたに追いかけて弱っているビスマルクが私に相談して来るようになったんですよ。いつもは相談に乗る側だったにもかかわらず、ね。それでようやく私があの子の心に入り込めるようになったって訳。あなたはそのきっかけを作ってくれたんです」

「私を利用したと言うのか……?」

「そう言う事になりますね。とにかく、私に色々吐き出してくれるようになったし、すっかり私のことを信頼してくれるようにもなってくれましたね。そうなれば私の物になってくれるまで時間はかからなかった。『私がアークロイヤルからあなたを護る』と言ったら無条件に承諾してくれましたし」

すなわち、表向きはアークロイヤルとビスマルクの間を取り持つフリをして、その裏でビスマルクを物にすべく工作を進めていたという事になる。

「貴様……そんな卑怯な奴だったとはな……!」

「暴力を利用して自分の気持ちを押し付けようとする人よりはマシだと思えますけどね?」

ううっ、と呻いてアークロイヤルは俯いてしまうが、再び顔を上げて、

「とにかく、そこを通してくれ。ビスマルクにちゃんと説明させて欲しいんだ」

と依頼するが、当然今のリットリオがそんな事を許可する訳が無い。

「今更何を説明するつもりなのかしら? それに、今の私はあなたからビスマルクを護る為にここにいますよ? 通るのなら私を倒してからにさい!」

リットリオは元々火力が自慢の戦艦だ。しかも今の彼女は鎮守府の屋内にいるにもかかわらずフル装備の状態である。外出していたという事もあって空母として最小限の装備しか身につけていない

アークロイヤルには明らかに分が悪い相手だ。

「分かった。例え無理でも抜かせてもらおうっ！」

「勇気と蛮勇は違うのだけど、それでもいいのならいらっしやい。
……ビスマルクが嫌がるでしょうけどね」

ここで突然ビスマルクの名前が出てきたのでつい戦闘への意欲が削がれ、

「おい、何故ここであいつの名前が出てくるんだ？」

と、アークロイヤルが聞く。

「艦娘同士の戦闘ともなれば両方が無事なんて事にはなりませんからね。少なくともどちらかが、まあ大抵は大なり小なりの怪我を両方がする事になるんですよ」

それはそうだろう。艦娘は人の姿をしてはいるものの、同時に強力な兵器そのものでもあり、それらが互いに攻撃し合うのであれば無事で済むはずがない。

「ビスマルクを護るって約束をした時にね、今みたいな事も起きるだろうって事は言っておいたんですよ。そうしたらすごく不安そうな顔で『そんな事になるのは嫌だから出来ればやめてくれ』って私が怪我しちゃう事を心配してくれて。ああ、あなたが怪我するかはどうでもいいみたいですけどね」

リットリオがさりりと言った最後の一言が、その実アークロイヤルにとっては決定的な一撃となった。評価の対象にすら入っていないなんて、そんなバカな。もはや顔面蒼白となってそう考えるアークロイヤルに対し、リットリオはこう続ける。

『愛の反対は憎しみでは無く無関心だ』って確か誰かが言ってたと思うけど、誰だったかしら？ とても説得力のある言葉だと思いませんか？ ビスマルクは疲れちゃって考えたくも無いのかもしれないですね」

「そんな、私はただ……」

「言い訳の時間はもうとっくに終わってるの！ あなたはもはやビスマルクに詫げる事も出来ない立場だという事をいい加減理解しなさい！」

アークロイヤルの顔からはもはや何も読み取れず、また微動だにす
る事も無くなつてしまつていた。リットリオの言っている事が聞こ
えているのかも分からない。

「私を突破しようというのならば応戦はしてあげますよ？ 私があな
たに傷つけられるとあの子は悲しむかもしれないけど、もう私はあ
の子を護らなければいけない立場なんですから。前哨戦にはもつてこ
いだわ」

リットリオのいう「あの子」とは、当然ビスマルクの事だ。飄々と
そう言つてのけるものの、その体から凄まじいまでの殺気を発し、さ
らに不退転の決意をも漂わせるリットリオ。

もうアークロイヤルは何も言わなかつた。というより、何も言えな
かつた。こんな彼女に対し、リットリオはこう通告する。

「さあ、今すぐ戻りなさい、ライミー！ ビスマルクをこれ以上悲しま
せたくないのならね！」

窓の外でしとんと雨が降り続く中、沈黙がその場を支配する。ど
ちらも発言しようとしないうまましばらく時間が経過したが、そのう
ち、

「そう、か……。そうだったんだな……」

誰に言い聞かせるでもなくアークロイヤルはそう呟き、そして、
「わかつた、戻るよ。それにもうビスマルクを追いかけたりもしない」
と毅然とした態度でそう言ってくるりと背を向け、その場を立ち
去つた。

あくまでも落ち着いた風を装っていたが、それも自室に戻るまで
だった。室内に入つて後ろ手にドアを閉めた瞬間、アークロイヤルの
目からドツと涙があふれ出た。

「ビス、マル、ク……。私じゃ、ダメ、だつたん、だなつ……。！」

そんな言葉を絞り出して、ソードフィッシュを取り出す。
(コイツの事もそこまで嫌だつたんだ……。だけどコイツは悪くな
い。悪いのはコイツを使ったバカな私だ)

その手からソードフィッシュがぼとりと落ちる。もはや力の入ら
ない体を何とか自室に置いてある椅子の所へと持つて行き、そこへ崩

れるかのように座り込んだ。そして上を向き、涙に歪められた視界で天井を眺める。それでどうにかなる訳でもないが、それ以外にどうしようもなかった。何とも息苦しく、体が重く感じてしまつてまともに動かせそうも無い。

今自らが実感しているのとつもなく苦しい気持ちと、それに呼応した体の反応から、自分がどれだけビスマルクの事を本気で想つていたのかという事を改めて思い知らされる。だが、ビスマルクが自分を愛してくれる事など無い。リットリオは「ビスマルクはあなたに関心が無い」と言つていたが、それはつまり嫌悪が極まつたからこそ関心が無くなつてしまつたという事に他ならない。すなわち、ビスマルクの自分に対する感情のスタート地点は「嫌い」だった訳だ。

「結局告白なんかしたつて断られるだけだつたつて事じゃないか……何も言わないで正解だつたなあ、ハハハハ……」

涙にまみれた死んだような目でそう独り言ちる。

再会した当初こそ何としてもビスマルクを自分の物にしてみせると意気込んでいたが、結局の所、そんなアークロイヤルの気持ちは単なる一方通行な代物でしかなく、その気持ちに対する応答があることすら期待すべきでは無かつたと言う事だ。

もはや出来る事といえは泣く事ぐらいだ。それほどアークロイヤルの心はズタズタに引き裂かれたかのようになつていた。まさか失恋がこんなに辛いものだったなんて、などと思ひ、到底心構え一つでやり過ごせるような物でも無い事をも痛感させられる。我慢しようにも次から次へと、ボロボロと涙が溢れ出てきて止まらない。惚れた相手に嫌悪されるよりも戦場で敵の攻撃の的にでもなつていた方はるかにましだとすら思えてくる。

更に辛いのは、アークロイヤルはこの鎮守府にこれからも在任し続けなければならず、失恋した相手が他の女と仲良くしている所を見続けなければならぬという事だ。これこそまさに針のムシロ。ビスマルクにとって無意味なものと思はされてしまつた時点で、戦場での能力という意味ならばともかく、心理的にはここに居場所など全くなく、自分には存在するだけの価値も資格も無いとしか思えなくなつて

しまった。それほど絶望的な気分になってしまっていたものだから、
アークロイヤルらしくなく、

「ああ……死にたい……」

と呟いてみたのだが、その瞬間、

「何ならUーボートに頼んで雷撃処分してあげましようか？」

という声が聞こえてきたので、思わずアークロイヤルは体を跳ね上げてそちらを向いた。そこには聞き間違えるはずもない声の持ち主、ビスマルクがいた。シヨックのあまりドアの鍵をかける事を忘れてしまい、ビスマルクが室内に入ってきて来ていた事にも気づかなかつたのだ。アークロイヤルは目を大きく見開いたまま、

「何で、お前が……ここに……」

と言つて固まつてしまった。ここはアークロイヤルの自室だから、わざわざ自分を嫌っているビスマルクが来るような所ではない。

「ん、リットリオに頼まれたのよ。アークロイヤルの事いじめすぎたからフォローしてあげてって」

そう言われたアークロイヤルは泣き腫らして赤くなった目でビスマルクを睨み、

「……一体何をフォローすると言うんだ？ これからは厄介なヤツに
関わらなくて済むからむしろせいせいした所なんじゃないのか!？」

と、これまたらしくもない台詞を言う。

(ああ、この子ってこんな感じになつたりもするんだ)

好きな人の事を想うあまり却って深く傷ついてしまい、もはやその事すらも隠せない程に弱つてしまっている。それはビスマルクにとって初めて見るアークロイヤルであった。

「今のあなたを見ればはつきりわかるわ。私の事が好きだつていう話、本当だったのね……」

そうビスマルクが言ったその瞬間、アークロイヤルの目が大きく見開かれる。彼女が把握している限り、自分の気持ちを知っている者は自分を除けば一人しかいないはずなのだ。

「リットリオが喋つたのか!？」

あの女は口も軽いのか、と呟くアークロイヤルの怒りの矛先をそら

すかのように、

「落ちてたわよ。ダメじゃない大切な機体をいい加減に扱ったら」

そう言ってビスマルクはソードフィッシュをアークロイヤルに見せる。

リットリオに言われてこの部屋に来て見たのだが、ノックをしても反応が無いし、鍵もかかっていなかったから思い切って勝手に入室して見たものの、そこであのアークロイヤルが自分の存在に気づくでも無くただひたすらに泣いていたのだからびっくりしてしまった。更には足元にはソードフィッシュが転がっているのを見つけ、大切な機体なのにこんな扱いをしまっているのだから、今のアークロイヤルがどれほどのショックを受けているのかがビスマルクにも分かったのである。

元々、リットリオの部屋にいた時に「あの子はあなたにフラれたと思っ込んでダメージを受けているはずですよ」という事を事前に聞かされてはいたのだが、まさかこれほどとは思わなかった。

「私が怒っちゃったのもこうなつた原因よね？ それに関しては私も悪いなと思つてて」

「……別にそんな慰めなんかいらない」

アークロイヤルは鼻をすすりながらそう言う。すっかり拗ねてしまっている。

「飛ばすなって約束を私が破つたのは事実じゃないか。お前は怒って当然なんだよ」

「でも約束を破っちゃうくらい頭に来てたのよね？ あの時のあなたも」

アークロイヤルは無言のままだ。ビスマルクはそれを肯定と捉え、続ける。

「さつきリットリオの部屋にいた時にね、その事も話したのよ。あなたがあの時なんでそんな事したのか分からなかったから」

随分と何でも話してるんだな、流星に恋人同士だと違うね、等と皮肉めいた事を心の中で呟きながらアークロイヤルはビスマルクの話の聞いている。

「そうしたらリットリオに笑われてしまったわ。それであなたがこの子を飛ばした理由も説明してくれたの」

ビスマルクはソードフィッシュを片手に、更に続ける。

「ヤキモチ焼いちやったんでしょ？ 私が他の子と仲良くしてたから」

一瞬虚を突かれたかのようなのであったが、ほんの少ししてアークロイヤルが寂しそうになづく。

「自分でも呆れてしまうよ。どうやら私はお前を独り占めにしたという気持ちがとても強いみたいなんだ」

「思わずソードフィッシュを飛ばしちゃう程に？」

「ああ、とにかく不安になってしまっただけ。だけど今後は本当にもう二度とお前に向けてソードフィッシュは飛ばさない。そもそも嫉妬する権利なんて今の私には無いんだからな」

「この子を飛ばさないでくれるのはありがたいけど、嫉妬する権利が無いって言うのはどういう意味？」

「私はお前の隣にいちやいけないうって意味だよ！ そもそもお前はリットリオと付き合ってるんだろ!？」

「ああ、それリットリオの嘘よ」

「はあっ!？」

アークロイヤルはポカンとしてしまう。実にあっさりビスマルクが言うものだからそんなリアクションになるのも当然だ。

「おい、それ、本当……なのか?」

『弱い所は見せたがらないし、思い込みの激しい子だから一度ガツンと凹ませてあげないとちゃんとあなたと向き合える状態にならないと思った』ってリットリオが言ってたわね。私に代わりに謝っておくように頼まれたわ」

要するに改めてビスマルクとアークロイヤルが会話できる状態に持っていくためにリットリオが一芝居打ったと言う訳である。その効果はてきめんで、今までのアークロイヤルだったらまず外に出さないような部分をもさらけ出すようになり、アークロイヤルの本質について今一つ理解出来ていなかったビスマルクが初めてまともにアーク

クロイヤルを見る事が出来るようになったというのが現在の状況である。

「なんだ、それ……」

頭を抱えながらうつむくアークロイヤル。ビスマルクは微苦笑をしつつ、

「いじめすぎた、って言うリットリオの言葉は本当だったみたいね。普段のあなたはすごく元気で頑張り屋じゃない？ だからそんな子が泣いちゃう事もあるんだなって思ったわ」

「好きな奴が他人に取られたんだぞ?! しかもその好きな奴は私の事が嫌いなんだ! 泣きたくもなるだろうが!」

未だにやり切れない気持ちのアークロイヤルはそんな言葉をビスマルクにぶつける。

「さつきも言ったけど、私がリットリオと付き合ってるって言うのはリットリオの嘘な訳でしょ。それとね……」

ビスマルクは一旦言葉を区切って、続ける。

「私は『あなたの事が嫌い』なんて一度でも言った事があつたかしら?」

そんな事を言われてしまい、アークロイヤルは、

「う、え……?」

などと間の抜けた声を上げてしまう。

確かに、思い返せば避けられているという印象こそあったものの、ビスマルクが自分の事を嫌いなどとはつきり口にして言っていた記憶はない。これはリットリオを始めとする他の艦娘の話も聞いていても同じ事だ。

「だけど、嫌いなんだろう、私の事が?」

これまでの反応を見れば、アークロイヤルとしてはそう判断せざるを得ない。ところがビスマルクは、

「それがねえ、わからないのよ」

と、少し困ったような顔でそう言うのである。

「あなたが私の事を好きだって言う気持ちは、理解出来たつもりよ。でも恋人同士ならお互いに好きって言う感情があるのが普通だと思

うの。それで、正直に言うのと私の方があなたの事を好きかどうかって言う事も自分ではわかってないの」

そう言うってからビスマルクは真顔で、

「そんな訳だから、この際きちんと確認すべきだと思ってるの」と言った。

結局、私の事なんて嫌いなくせに、何をグダグダ言ってるんだ、さつさとこの場から消えてくれ。そんな風にアークロイヤルが考えていると、ビスマルクはこんな事を言い出した。

「だから、アークロイヤルにお願いがあるのだけれど……私にキスしてくれないかしら?」

「……は?」

アークロイヤルはあっけにと取られてしまう。一体この女は何を考えているんだ。何をどうしたらそんな話になるんだ、という思いが頭の中でくるくると回り出す。

「普通、キスするのは好きな人同士でするものじゃない?」

そう前置きをして、ビスマルクはこう続ける。

「逆に好きじゃない相手にキスをされるのはすごく気持ちの悪い事らしいわ。あなたとキスを試してみても気持ち悪いと感じたら、それは私があなたを嫌いだって言う事になる。もし、気持ち悪くないと思ったら、多分私はあなたの事が好きなんだと思うの。さつきも言ったけど、今の私は自分でもあなたをどう思ってるのかはわからない。だから試して見て欲しいのだけだ」

「お前は、それでいいのか?」

と、アークロイヤルが聞く。それに対しては、

「ええ」

と言う短い答えが返ってくるのみ。そんなビスマルクは全くの無表情である。

相手がしろと言っている。どうせ自分がビスマルクに触れる事が出来るのは今が最後の機会なんだ。そんな、やけっぱちな気分と共にアークロイヤルは腹を括り、ビスマルクに近づいて行ってその両肩を掴む。その瞬間、ビスマルクの体が一瞬だけピクリと震える。

「キスするぞ。いいな？」

というアークロイヤルの確認に対し、

「ええ、してちょうだい」

と、ビスマルクが返したので、ゆっくりと顔を近づけていく。

アークロイヤルとビスマルクの唇が重なり合った。時間にしてほんの数秒、少し触れ合う程度のささやかなキス。

肩を掴んだままそつと体を離し、アークロイヤルは恐る恐るビスマルクの顔を見た。その表情からは嫌悪感は何えないが、内心ではどう感じているのだろうか。そんな不安が胸をよぎった時、ビスマルクが意外な一言を発した。

「一度だけじゃわからないわね。もう一度してもらえるかしら？」

「えっ？」

アークロイヤルは驚いてビスマルクの顔をじつと見つめた。相手が一体何を考えているのかいよいよもって分からなくなる。

「嫌？」

「そんな事は、無い……」

二度目のキス。今度は一度目よりもやや力強く、時間も長かった。

顔を離して再びビスマルクの表情を伺う。相変わらず嫌悪感を感じているようには見えない。それどころか、ほんの少し頬が上気しているようにも見えた。

今度はアークロイヤルから言ってみる。

「悪いが、もう一度いいか？」

それに対してビスマルクはコクリと頷いただけだ。

三度目。今までよりも強く唇を押し付ける。ビスマルクの唇の柔らかい感触は病みつきになりそうな心地よさだ。更にここに来てビスマルクの両腕がアークロイヤルの背中に回された。

再び顔を離すが、この時点で二人の視界に映っているのはすっかり赤くなった相手の顔。そしてどちらからともなく無言のまま接近して四度目のキス。

もはやそれまでの遠慮は無かった。力強く抱きしめ合い、夢中でお互いの唇の感触を貪るように味わう。今度は離れるのも惜しくなり、

だから時間も長くなってしまった。ゆうに数分は経過していただろう。ようやく二人の体は離れた。

「クスツ、なんて顔してるのよ」

ビスマルクが優しく語りかける。アークロイヤルは再びポロポロと涙を流していたのだ。

「わからないんだ……！ もう私の中、グチャグチャで……！」
話すのもままならない。

「これが最後で、お前とはダメなんだろうなって！ でも、さっきの
で、期待していいのかって、不安で、怖くてっ……！」

ここに来て、自分の弱い部分を容赦なく曝け出す。そんなアークロイヤルを見ながら、

「私ね、あなたとキスしてて、気持ち悪いなんて事は全然無かった。むしろすごく良かった」

と言うビスマルク。そんな彼女を涙ながらに真っ直ぐ見るアークロイヤルの表情は明らかに不安そうで、まるで判決を待つ刑事被告人のそのようだ。

「今ので確信が持てたわ。私はあなたが好き。アークロイヤル、あなたはどう？」

「好きに決まってるだろう！」

そう言つてアークロイヤルは再びビスマルクを抱きしめる。

「好きだ！ どうしようもないくらい好きなんだ！ だからお願いだ、私のそばにいてくれ！ どうか離れないでいてくれ！」

ビスマルクに抱きつきながらそう懇願するアークロイヤル。

「お前に嫌われたら……お前にいなくなれたら……私は……私は…………！」

元々泣いているのに声の震えが更に激しくなった。自分の発言がますます自らの恐怖感を煽つてしまっているのだろう。そんなアークロイヤルを抱き返す腕に更に力を込めながら、ビスマルクは言った。

「大丈夫、ずっとそばにいるから」

その瞬間、アークロイヤルの体がビスマルクの腕の中でビクツと小

さく跳ね、後は、

「うう、うううう……！」

と、感極まってしまったのか、ろくに喋る事も出来ずに本格的に泣き出してしまった。

(この子ってすごく可愛いのね……)

アークロイヤルを抱きしめながらビスマルクはそう思った。先ほどの拗ねているアークロイヤルも可愛らしかったが、こうやって全力で甘えてくるアークロイヤルはこの上なく愛しく思えてくる。

本当に自分の事が好きで好きでしようがないのだろう。かなり不器用な娘ではあるが、自分に向けられている気持ちそのものは本物だ。それ自体は悪い気はしない。いや、悪い気はしないどころかとても嬉しいし、そんな相手を悪く思えるはずもない。この子がそれだけ本気なのなら私もきちんと応えなきゃ、ビスマルクはそう思った。

「また、どこかヘデートしに行きましようね。ああ、それから、私と同じ艦隊で働きたいって言っているらしいわね？ その為に無理をしたらダメだからね？ 焦らなくても私は待つてるから」

「うん、必ずお前を護れるような奴になる……！」

アークロイヤルは涙声でそう言った。アークロイヤルが泣き止むまで、ビスマルクは彼女を抱きしめ続けた。

しばらくしてアークロイヤルが落ち着くと、二人は抱擁を解いたが、アークロイヤルは急に照れくさくなったのか、「ちよつと紅茶を用意してくるよ」

と、キッチンへ向かいだした。ほんの少し歩いて「あっ」と言っただけからほんの少しだけビスマルクの方へと顔を向け、

「お前はコーヒーの方がいいか？」

と、聞いたものの、

「いえ、私も紅茶がいいわ」

と、ビスマルクが言うので、

「ん、分かった」

と言ってキッチンへ入って行った。

しばらくしてからアークロイヤルが紅茶とスコーンを持って来て

二人きりでお茶会となった。アークロイヤルの生まれ故郷は紅茶の入れ方だけで学術論文が何本も発表されるというお国柄だから、紅茶が不味い訳などない。元々料理は不得手との事だが、少なくともお手製のスコーンに関してはなかなかの美味であった。ビスマルクがその事を伝えると、アークロイヤルは「そうか、ありがとう」と照れながら返事をする。このお茶の席が何となく楽しく感じてしまうのは、何もビスマルクに紅茶やスコーンの味を褒めてもらったからばかりではあるまい。

そんな時、突然、ビスマルクが、

「ああ、一応言っておくけど」

と、一呼吸置いてから、

「さっきの、私のファーストキスだからね？」

と言った。アークロイヤルは驚きを隠せず、

「そう、だったのか……」

と返すのが精一杯だった。意外だという思いと共に、意中の相手のファーストキスを貰ったのが自分だという事実にも何とも言えない嬉しさが込み上げて来る。

「なあ、ビスマルク」

「何？」

「もう一度、抱きしめていいか？」

「ええ、勿論」

そう言うないやアークロイヤルは飛びついてきた。受動的だったとはいえこれはビスマルクも望んでいたことだ。もはや今の彼女にとってアークロイヤルの温もりはとても心地良いものになったのである。

どうにも離れがたくて、二人はしばらく抱きしめあつたまま動けず、また動くつもりもなかった。

結局、ビスマルクはその晩から翌日の朝までアークロイヤルの部屋で過ごした。ただ、あくまでもキス止まりであつて、そこから先に進展した訳ではないが、そこは別に気にする所でも無いだろう。それは

並んで歩く二人の明るい表情を見れば明らかだ。

「こんなにくつすり眠れたのは久しぶりだよ」

伸びをしながらアークロイヤルが言う。

「眠れてなかったの？ 結構頻繁に夜戦に参加してたっていうのは聞いているけど」

と言うビスマルクの問いに、

「ああ、夜戦が多かったというのもあるんだが……まあ、ここ最近は何色々と考え過ぎていたみたいだ。結構そういう事でも眠りつていうのは妨害される物なんだな」

自らの頬を人差し指で軽く掻きつつ、少し照れ臭そうにそう言うアークロイヤル。

「ダメよ、睡眠はきちんと摂らなきゃ。お肌に悪いわ」

と、注意した事に対し、「そうだな、気をつける」と、アークロイヤルが返答したのを確認した上で、

「ところで」

と、あえて悪戯っぽい表情を浮かべてビスマルクは話題を変える。「その考え過ぎていた色々っていうのは、もしかして私に関係するのとかしら？」

その途端アークロイヤルは立ち止まり、少し頬を赤らめながらもまっすぐな視線でビスマルクを見つめつつ無言でコクリと頷いた。

「そ、そう……」

と、一言だけ発してビスマルクもまた黙り込んでしまった。ちよつとしたおふぎけのつもりで聞いてみただけなのに、迷いなど一切ない純粋な反応が返ってきたものだから、却って恥ずかしさが込み上げて来て相手に視線を合わせ続けることが出来ず、間抜けな質問をしてしまったと後悔した。

（もう、この子本気過ぎなのよ！）

ビスマルクは心の中でそう叫ぶ。ソードフィッシュを飛ばされるのも困るが、こんな風にあまりにもストレートな愛情表現を連発されても別な意味で耐えられなさそうに困る。

そんな微妙な雰囲気を伴った沈黙を破ったのはアークロイヤルの

方だった。

「そういうお前は眠れているのか？」

「ええ、お陰様でよく眠れたわ」

「いや、昨日の事じゃない。それより前だ」

この質問に関しては一瞬返答に詰まったが、正直に答える事にする。

「はつきり言つて、満足に眠れるような状態じゃなかったわね。だから、久しぶりにぐっすり眠れたのは私も同じなの」

「眠れていなかったのは……私のせいだよな。……すまなかつた」

アークロイヤルの声が弱々しくなってしまう。

「もうそれはいいのよ。これから先はそういう事も無いんでしょ？」

「ああ、それは私が高んとしても保証してみせる」

と、一言区切つた後、更にアークロイヤルが、

「それに、もう肌が悪影響を与えるような事はお互いやりたく無いだろう？」

と碎けた口調と表情で言つたものだから、ビスマルクは笑顔で、

「それは当然ね。無理に夜戦に参加するのもダメよ？」

と言つて、と言つてアークロイヤルに柔らかい視線を投げかける。

二人は見つめあつたまま、一瞬だけ、再度沈黙があつたが、すぐに耐え切れなくなつて、どちらからともなく吹き出すように笑いが起こつた。

「その様子だと上手くいったみたいですね」

そう言いながら二人に近づいて来る人物がいる。リットリオである。

「そうね、ありがとう。でも借りを作っちゃつたわね」

と、ビスマルクが明るい表情で言えば、

「後日利息上乘せで請求しますね」

とリットリオが返し、二人でクスクスと笑う。

そんな時、リットリオの視界が鋭い視線を捉えた。もちろん、その視線はアークロイヤルの物。リットリオは微笑を浮かべたまま、

「心配しないで。別にあなたの恋人を奪つたりするつもりなんかあり

ませんから」

と、アークロイヤルに言った。

「……今一つ信用が出来無いんだがな」

アークロイヤルは不機嫌そのものだ。ビスマルクとの恋愛が成就出来るよう色々と動いてくれたのは感謝しなければならぬのだろうが、その過程で自分にはあまりにも振り回され過ぎたという意識がリットリオに対してはある。それに今ここでビスマルクと親しげに話している事も面白くない。加えて昨日の衝突にしても何故あそこまでビスマルクに対して献身的になれるのかというのも疑問点として残っている。リットリオはそれを気にするでもなく、

「そうね、今は別に信用してくれなくてもいいんですよ。信用は時間をかけて積み重ねていくものだもの。」 My word is my bond (私の言葉が私の証書) ”……確かあなたの国では信用というものを言い表す為にこういう言葉があるのでしょう?”

と、さらりと、しかし強引に論点をずらすかのように話をはぐらかしてしまふ。

「いや、確かにそんな言い方もあるにはあるがそれはシテイの奴らが使う言い回しであってそもそも私が言っている信用というのは……」

と、アークロイヤルがボソボソと言うのを無視してリットリオは更にこう続けた。

「それとね、あなたがビスマルクをまた泣かせるような事があれば、さっきの発言を撤回させてもらいますね。あなたはやっぱりビスマルクにふさわしくないという事になるんだし、その時こそはビスマルクを私の物にしますから」

この発言に思わずカツとなったアークロイヤルはビスマルクとリットリオの間を半ば遮るような位置へと移動し、

「ふざけるなっ！ 私はビスマルクを泣かせるような真似なんかしないし、まして貴様にビスマルクを渡すなんて事は絶対にしないからな！」

とリットリオを睨みながら強い口調で言い切った。

リットリオはクスツと笑って、

「そう、その意気です。せいぜい頑張りなさいね」

と言つて、二人の横を通り抜け、その場を立ち去った。

「あいつはっ……!」

今だに怒り冷めやらぬという表情でリットリオの後ろ姿を睨み続けるアークロイヤルに対し、ビスマルクは微笑みながら、

「だから大丈夫。ちよつとキツイかもしれないけど、あれはリットリオなりのジョークよ。あの子が私の恋人になるような事なんて絶対ないんだから」

というので、アークロイヤルは、

「何故だ? どこにもそんな根拠はないと思うが……」

と、不審げな顔をビスマルクに向ける。それに対してなんて事も無いようにビスマルクはこう言った。

「リットリオはちゃんと恋人いるもの。もちろん私じゃない相手よ」

初耳であった。驚いたアークロイヤルが、

「え、それは誰だ?」

と聞き返すと、

「あなたもよく知ってる人。アトミラールよ」

という返答が返って来たものだから、驚きを通り越して唾然としてしまった。確かに、リットリオに対してはビスマルクとの関係を疑っていたし、そうでなくとも然るべき相手がいるのではないかとは思っていたが、まさかこの鎮守府のトップとそういった関係であったというのは完全な想定外だ。

「リットリオは確かに恋愛に関して私達よりも一枚も二枚も上手よ。でも色んな子と遊ぶようなタイプって訳じゃ無いの。むしろ逆ね。本当に一途で、アトミラール一筋なの。だから、私も含めてアトミラール以外の相手がリットリオの恋人の候補に挙がる可能性なんか元々無いのよ」

と、ビスマルクはリットリオの恋愛事情について説明した後、ふと思いついたようにアークロイヤルにこう続けた。

「もしかしたら、リットリオは私達の事をものすごく応援してくれているのかもしれないわね。特にアークロイヤル、あなたの事を」

リットリオは見た目とは裏腹にその内面に激しい情熱を秘めているタイプだ。アークロイヤルもそれは同様で、しかもビスマルクに対して一途。根本的な所で自分と似ている部分があると感じたからこそ、あえてああいう行動を取ったという可能性はあるのかもしれない。

ようやく状況を理解し始めたアークロイヤルは片手を額に当てて、「やられたっ……いっ…… やっぱりの女は信用出来ない！」と、悔しげに吐き捨てた。

そんな彼女の様子を見たビスマルクがクスクスと笑いながら、「この噂話にちよつと耳を傾ければ分かる事なんだけど、本当にあなたって私の事しか見てなかったみたいね」

と、いつて来たので、少しムツとしたアークロイヤルは、「……悪かったな、視野が狭くて」

と、いつてふいと顔を背けてしまった。

「ううん、そういう意味じゃなくて。それだけ私の事を想ってくれたのが分かって嬉しかったってだけよ」

そうビスマルクが言ってもアークロイヤルは黙って顔を背けたまま。ただ、アークロイヤルの顔が紅潮しているのはビスマルクの位置からでもはつきりとわかった。

「ねえ、こっちを向いてくれないかしら」

とビスマルクが聞いてみると、アークロイヤルからは、「嫌だ」

という返事しか返って来ない。

「それは何故？」

と聞いても、

「今は顔を見られたく無い」

と言うだけである。泣き顔まで見せておいて今更何を恥ずかしかっているんだ、と思いつつ、それ程までに見せたくないのならば意地でも見てやろうという悪戯心がビスマルクの中に湧いてきた。

「いいじゃない。昨日だっつてすごい顔をしてたのに」

「それを言うな！ ああ、そうだ思い出した！ 私は演習に参加しな

ければいけないからそろそろ行くからな！ 集合時間に遅れてしま
うのは不味いんでなあ！」

赤面した顔を見られたくない一心でアークロイヤルは一気にそう
まくし立て、早足でビスマルクから遠ざかり始めた。演習に参加する
予定があるのは事実だから嘘は言っていない。ただし、その集合時間
まではまだかなり余裕があると言うのが実際の所だ。そしてその事
を把握していないビスマルクではない。

「でも私に顔を見せる時間ぐらいはある訳でしょ？」

「そう言う問題じゃない！」

「ちよつと待ちなさいって」

「断るー！」

空は快晴、明るく降り注ぐ太陽の光の下で、逃げるアークロイヤル
に追うビスマルク。この鎮守府で再会した時とは完全に立場が逆転
してしまっている形だ。当初の懸念と問題はひとまず解消された
と言って良いだろう。

強いて言えば、今現在のこの状況、それが極めて馬鹿馬鹿しい理由
で発生していると言うのが問題といえれば問題であろうか。

アークロイヤルが困るワケ

夜勤があるメンバーを除けば今日の業務は一通り終了、と言う時間になって、鎮守府の食堂では夕食を終えた艦娘達が数人で集まって雑談していた。どうやら今のテーマは音響機器に関するものようだ。

「まあ、機種にもよるだろうし、印象論になってしまうんだが……元々あそこは今も業務用製品に力を入れている訳だろうか？　そういう製品はスタジオで収録とかにも使うんだし、むしろ特徴の無い音じゃないと録った音のミックスをやったりする際に使いづらいからな。一般向けの製品でも他のメーカーのような強い個性を持った物は開発側の気質的にやりたがらないんじゃないかな」

別のメーカーの製品に乗り換えてみたところ、どうもその製品の音が無難すぎて拍子抜けしたのだがそういうものなのだろうか、と言った艦娘がいたため、それに対してアークロイヤルが示したのが先ほどの見解だ。

「ああ、あの中間ボリュームには賛否があるみたいだな。私も必要かどうかと言われれば疑問は感じている方だから、大抵は最大音量に設定しているよ。ただ、プレーヤー側の音量を大きめにして中間ボリュームで絞るってことをやると音質が向上するって言う知人はいたな。私自身はやってみても今一つピンとこなかったけど」

今度はアークロイヤルが使っているイヤホンの話。その製品はコードの途中にボリュームが付いていてここで音量が調整出来るのが特徴なのだが、プレーヤー側にボリュームがあるのにここにもボリュームがあったら余計な回路を通る事で音質が劣化すると思われる者と、むしろプレーヤー側のボリュームを固定したい場合の使い勝手は良いし逆に使い方次第では音質の向上が狙えると考える者もいて、利用者の間では意見が分かれていた。アークロイヤルが最大音量にしているのはボリュームの回路の影響を受ける事なく信号をそのまま通過させる事を狙っている為だろう。

「あはは、まあ本当かどうかは分からんが確かにゼンハイザーはヒット商品が出るとその偽物も出回るとい話は聞くなあ。幸か不幸

か私はそういうのを引いたことは無いが……」

そう言った後、アークロイヤルがふぎけた口調で「もし偽物を掴まされていたら今ここで試験報告が出来たのに」と言うと一緒に笑いが起こった。

会話に参加しているのは何も日本艦だけではない、この鎮守府には様々な国から艦娘が派遣されており、アークロイヤルの所属するイギリスはもちろんのこと、かつて日本と同盟を結んでいたドイツやイタリア、さらにはアメリカやロシア、フランスの艦娘も参加していた。(この鎮守府も設立時は日本艦だけだったらしいと聞いていたが、それが本当なら国際色豊かになったんだな)

などと思いつながらアークロイヤルが艦娘達の会話に耳を傾けていると、急に背後から声がかかった。

「何だか随分と楽しそうじゃない？」

振り返るとそこにいたのはビスマルクであった。

「アーク、今は何の話してるの？」

自然とビスマルクとアークロイヤルに周囲の視線が集中する。それは別にいいのだが、明るい声とは裏腹にビスマルクの自分を見る目が全く笑っていないのでそれが怖い。

「うん？ ああ、今話題になってるのはみんなが普段使ってるイヤホンとかヘッドホンの音とか、その辺りだな」

と答えると、

「ふうん……」

ビスマルクはそれだけ言って、いきなりアークロイヤルの隣に並んだと思ったら、自分の肩に手を回してきた。

(お、おい……)

アークロイヤルは焦ってしまふ。無関係な多くの他人の目があるというこの状況下、幾ら何でも自分たちの関係が露骨に分かってしまうような行動を取ってしまうというのはいかなものだろうか。

「取りあえずお話には一区切りついているのよね、アーク？ 明日の演習の打ち合わせしておきたいの。ちよつと来て」

有無を言わさないといいた感じでビスマルクはアークロイヤルを

連れて行ってしまおう。後に残されたのは一体何が起こったのかさっぱり分からないといった表情をしている他の艦娘達であった。

「なあ、ビスマルク。演習の打ち合わせならもうやっただろ？ 何か内容に抜けでもあったか？」

「別に無いわよ？ 打ち合わせなんて嘘だし」

「ええっ!？」

思い切り驚いてしまったアークロイヤルは思わずビスマルクを見つめる。本来のビスマルクは何の理由もなく平然と嘘を吐くと言うタイプではないはずだ。

「お前、一体どういうつもりなんだ？」

アークロイヤルがそう言うのは当然だが、ビスマルクはそんな彼女に言った。

「それはこつちが聞きたいわね」

ビスマルクの視線が鋭い。思わずゾツとしてしまうものの、相手の意図が分からないアークロイヤルはひたすらその視線を見つめ返しつつビスマルクの次の言葉を待つしかない。

「随分と楽しそうに話してたじゃない？ あの子達と」

問い詰めてくるビスマルクの声は恐ろしく冷たい。

「そりゃ、他の連中と比べればよく話す奴らだからな。話が盛り上がったたりもするし、それ自体は別にまずい事でもないと思うが」

そう言うアークロイヤルをビスマルクは黙って見つめていたが、しばらくして、

「……………そう」

とだけ言っただけその場を立ち去ってしまった。

(本当、何なんだ……………)

その場に取り残されたアークロイヤルはもはや困惑するしかない。

長年の願いが叶ってビスマルクと恋人同士になる事が出来たアークロイヤルであったが、最近はその関係がこじれ始めていた。

その理由はアークロイヤルには分からない。とにかく、先ほどのようにビスマルクがいきなり不機嫌になる事が多く、何故だと聞いても

まともに答えてくれる訳でもない。その都度、アークロイヤルは自分がビスマルクを不快がらせるような行動を取ってしまったかどうか振り返ってみるのだが、心当たりは無い。当然、ソードフィッシュを使って追いかけるというのは論外なので、今となっては全くやっていない。そもそも、以前ならともかく、今のビスマルクは作戦行動で別々になる場合を除けば大抵そばに居てくれるからその必要性も無いのだ。

だから尚更戸惑うばかりなのである。何とかビスマルクに振り返ってもらおうと追いかけていた時期もそれはそれで大変だったが、仲が深まっているはずなのにビスマルクの事が分からなくなっていくている気がしてしまう今もまたアークロイヤルの悩みは深いのである。

「うーん、今の話を聞く限りだと理由は分かりませんねえ……」

リットリオはそう言う。

アークロイヤルは悩みに悩んだ末、自力での解決は不可能と判断。ティータイムの時間を利用して第三者に助言を求めた事にした。相手は自分とビスマルクの間を取り持ってくれたリットリオと、同郷の友人でもあるウォースパイトだ。天気が良かったという事もあつて場所は鎮守府の広場を選んだ。普段なら他にも何人かの艦娘がこのお茶会に参加しているはずなのだが、相談の内容が内容だけにあまり大人数に話す気になれず、今日ばかりは参加者をこの二人に絞った上で相談に乗って貰っているのである。

「私も分からないわね。ビスマルクだってそうコロコロ気分が変わるタイプにも見えないのだけど……」

ウォースパイトも首を傾げている。二人ともこの鎮守府への着任はアークロイヤルより早い。だから元々ビスマルクの性格にしてもよく知っているはずなのだが、この件に関してはどうにも判断が出来ないようだ。

「やっぱり私が知らないうちに何かやってしまっているのかな……」

アークロイヤルは気だるげに空中に視線を向ける。

「いえ、それは無いと思いますけど」

リットリオは即座に否定する。

「そうね。そうじゃなければ一緒に居てあげたりはしないでしようし」

ウォースパイトもリットリオと見解は同じである。

「じゃあ、どうして……」

「何故、ビスマルクがいきなり怒ったりするのか、よね。アーク、あなたはちゃんとやっていると思うし、それはあの子も分かっているとと思う。今はビスマルクの食事だつてあなたが作つてあげてるでしょう？」

ウォースパイトの発言にリットリオが反応する。

「え？ ビスマルクにご飯作つてあげてるんですか？」

「ええ。この子料理は苦手なのに、『どうしてもビスマルクに作つてあげたい』つて言つてきたから、私が教えてたのよ。元々は私もそれほど得意ではないし、レパートリーは少なかつたから、こつちに来てから教えてもらった物の受け売りが多いのだけど」

ウォースパイトは笑いながらリットリオに言う。

「あー、その辺りは結構恥ずかしいからあまり言わないでくれるか？」
照れ臭そうに言うアークロイヤル。

「愛ですなー」

と言つてリットリオがからかうので、アークロイヤルは、

「だからやめてくれつて……」

と言いながら恥ずかしさのあまりとうとう下を向いてしまった。
そんな彼女を微笑ましげに見ながらフフ、と笑うウォースパイト。

「それで、ビスマルクの反応はどう？」

「それなんだが……最初は結構喜んでくれてたんだよ。世辞なんだろうが、『美味しい』つて言つてくれてたしな。けど近頃は何というか、食べていても無反応というか……、嫌々食べてると言うか……」

照れた表情から一転、アークロイヤルは再び困惑した表情に戻つてしまつていた。

「それも不思議ですなあ。ご飯を作つてあげるようになったのつて実

は結構前だったりします?」

「いや、最近だ」

うーん、と言つてリットリオは考え込んでしまう。以前から作っていたというのであればアークロイヤルの手料理の味に飽きてしまったという可能性も無くは無いだろうが、どうもそういう訳でもないらしい。おそらく、料理そのものが直接の原因という訳では無さそうだが、ビスマルクの態度の変化について何かしらのヒントは隠れているような印象を受ける。

リットリオがそんなことを考えていると、ウォースパイトがアークロイヤルに対して、

「話は変わっちゃうけど、あなたって私が教えてる最中も手を切つてたりしてたでしょう? 今は大丈夫なんでしょうね?」

と聞いた。

「ほんの少しミスをして軽いケガをした事はあるが、大した事はない」「ちよつと、見せなさい」

そう言つてウォースパイトはアークロイヤルの手を取り、確かめ始める。とても日常的に兵器を扱っているとは思えない色白の綺麗な手だ。

「……確かに問題は無さそうね。ここだけ、やけどの痕らしいのがあるのは気になるけれど」

「ああ、それはこのあいだ冷め切つてない鍋にうっかり触つてしまったやつだ」

ウォースパイトとアークロイヤルがそんなやりとりをしているのをぼんやりと眺めていたリットリオは次の瞬間、別の誰かの視線を感じたような気がしたのでふとそちらを向き、そして思わずギクリとしました。その視界が捉えたのは少し離れた場所から自分達を覗んでいたビスマルクの姿だったからだ。いや、正確にはリットリオを見ている訳ではない。ビスマルクが焦点を合わせているのはリットリオの隣にいる二人である。ほんの少ししてリットリオが自分を見ている事にビスマルクも気付いたようだ。すぐに苦虫を噛み潰したような表情でその場を立ち去ってしまった。

おそらくはたまたま通りがかっただけなのだろうが、普通ならばそれだけであなったりはしないだろう。

あの子、ものすごく機嫌悪かったわね、と思いつつ、完全に本来の話題から脱線してしまっているアークロイヤル達に向き直ってリツトリオは言った。

「えーと、私、分かったかもしれません」

「え？ 何がだ？」

と聞いてくるアークロイヤルに対して呆れたような顔をしてリツトリオはこう言う。

「……ビスマルクが怒っちゃう理由ですよ」

どうにも殺伐とした気分になってしまっただけで仕方がないビスマルクの背後から自分を呼び止める声が聞こえる。振り向けばそこに居たのはやはりアークロイヤルであった。

「……何？」

冷え切った声でビスマルクが聞く。

「少し話したい事があってな。ここじゃ何だから、場所を移動させてくれ」

「私は話したい事なんて無いんだけど？」

「こっちはあるんだよ。だから来い」

食い下がるように言うアークロイヤル。自分の気持ちはひとまず置いておいて、ビスマルクはアークロイヤルについて行く事にした。「で？ あなたが話したい事って？」

片手で乱暴に髪をかきあげながら高圧的に話すビスマルク。明らかに苛立っている。アークロイヤルはそれに臆する事無く、「お前が最近おかしい理由について考えていたんだが……」と切り出した。

「はあ？ 私はおかしくなんか無いわよ？」

と言うビスマルクに対して、

「ああ、こっちが勝手にそう思ってるだけかもな。だけど話させてくれ」

と、アークロイヤルは多少強引に自分のペースに持ち込む。

最近、ビスマルクの自分に対する態度について感じている事をアークロイヤルは話していく。

他の艦娘と会話をしている途中で強引に割り込んできたり、なぜか突然不機嫌になったりといった諸々が最近の変化である。

ビスマルクは黙って聞いていたが、時々顔面がひくついていた。

「それで、最近是我的料理も気に入らなそうに食べてるからな。不味いのならそうと言って欲しいんだが」

「別に不味い訳じゃ無いんだけどね」

「そうか。じゃあ、食事の時のあの態度はどういった理由だ？ 私と食べるのはそんなに不満か？」

「不満……そんな物は無いわ」

「嘘を吐け。だったらああはならないと思うが」

「あのさあ、何が言いたいなのよ？」

いよいよビスマルクが喧嘩腰になり始めた。アークロイヤルは言う。

「私がウォースパイトに料理を教わってるのが気になったりはしてないか？」

「……………」

表情を引きつらせてそのまま硬直してしまうビスマルク。凶星のようだ。それを確認したアークロイヤルは緊張したかのような、それでいて少しホツとしたかのような表情で、続ける。

「どうやらリットリオの指摘通りみたいだな。少し気に入らないが、やっぱりあいつの目は確かだ。さっき私とリットリオとウォースパイトが話している所も見てたらしいな？ で、ものすごく機嫌が悪そうだったってリットリオは言ってたよ」

「……………」

「何でそんな事で機嫌が悪くなるのかって事も説明してくれた。私にしてみれば思いつきもしない事だったけどな」

「だから、何が言いたいのかさっさと言いなさいよっ!!」

とうとうビスマルクが叫ぶように言ったかと思えば、間髪入れずにアークロイヤルがこう切り返す。

「お前、ウォースパイトに嫉妬してたんだろ？」

この瞬間、ビスマルクは目を大きく見開いてアークロイヤルの顔を見つめた。その状態がほんの少しばかり続いた後、苦しそうな表情と共に俯いてしまった。

「正解、か……」

しばしの沈黙。

「私とヤツはそういうのでは全く無いんだが」

アークロイヤルがそう言うてから、また少し間が空く。

「……本当は、そうなんでしょうね。でも、私、信じきれなくて……」

と、俯いたまま言葉を絞り出すビスマルク。

「一度、見た事があるのよ。あなたがウォースパイトに料理教わってるところ。本当、仲が良さそうで、まるで姉妹とか夫婦みたいで、間に入れそうな気が、全然しなくて……」

辛そうに一つ一つ言葉を吐き出している。食事の件については、あるタイミングから態度が急変したのだが、それがきっかけだった事はある。あり得る。

「さっきだって、ウォースパイトがあなたの手を取って眺めたりして……それ、私の役目でしょって……」

それを聞いてアークロイヤルは自分が逆の立場だったらどうだったかを一瞬想像してみた。自分以外の艦娘がビスマルクの手を取って怪我が無いかと細かくチェックしてあげているシーンを思い浮かべて、

(うわ、これは結構来るな……)

と、内心苦笑してしまう。

「あなた達、ずっと一緒だったものね。仲が良くても不思議じゃないのに……」

理解しようとしても、気持ちは全くついて来ようともしてくれない。そんな苦しさがビスマルクから感じ取れた。

「とすると、他もそうか。私がお前以外と話してる時不機嫌になったりしただろ？」

「……ええ、あなたが他の子と楽しそうにしてるの見てたら、つい……」

「ごめんなさい」

つまり、自分とアークロイヤルの間を邪魔されているかのように感じてしまったという事のようにだ。

(そういう事だったのか……)

結局、この件は極めて単純で、ビスマルクが嫉妬していただけなのである。

とは言えアークロイヤルは自分の迂闊さを後悔していた。

「いや、こっちこそ無神経だったな。嫉妬なんてつきり自分だけにしてるもんなんだとばかり……」

片手を額に当てて言う。相手が嫉妬しない保証などどこにも無いのだ。にもかかわらずそう思ってしまったのは惚れた弱みとでも言うのだろうか、元々はアークロイヤルの気持ちを受け止めてくれればそれで良かったはずの相手がまさか自分をそこまで気にかけてくれたりはしないだろうというある種の気弱な思い込みがあった為だ。

「自分でもびつくりしてるわ。独占欲って怖いわね……」

と、俯いたままそう言うビスマルク。

「あなたの事、どんどん好きになってるの。でも、何だか最近、あなたが遠くに行ってしまうんじゃないかって、そんなことばかり考えるようになってちやつてて、怖くて……」

震えながら自らの両肩を抱きしめつつそう言うビスマルクからは先程の威圧するような雰囲気はすっかり消え去ってしまった。

「ふうん……」

そんなビスマルクの周りをぐるりと一周回ったアークロイヤルが更にビスマルクの顔を覗き込んできた。なぜか嬉しそうだ。

「な、何よ?」

「うん、お前が嫉妬してくれたのがなんだか嬉しくてな」

「え……? 変なこと言わないでよ」

「だつてさ、嫉妬したのは私の事を好きでいてくれたからだろう?」

ビスマルクの顔がさつと赤くなり、その目は泳いでいる。

「それは、その、そうなんだけど……」

そんなビスマルクを見つめていたアークロイヤルであったが、その

後すぐに吹き出してしまった。

「ぷっ、ははははっ！ お前も大概だな！」

「もう、笑わないでよ！ 結構後悔してるんだから！」

顔をいよいよ真っ赤にしてしまったビスマルクが言う。アークロイヤルを独り占めにしたいばかりに衝動的に色々大胆な行動を取って来てしまっているのである。

「あー、なんかもう恥ずかしい。まるで私がバカみたいじゃない……」

ビスマルクは両手で顔を覆ってしまった。

「そんな事はないだろ？ むしろホツとしたよ。お前が私をどう思ってるのかがちゃんと分かったんだからな」

確かにお互いの気持ちが変わって確認出来たという意味では今回の件はむしろ収穫と言っても良さそうだが、その次の瞬間、アークロイヤルは鋭い目付きでビスマルクを直視しつつ、

「ただなあ、一つだけ気に入らない事があるんだ」

と言った。

「え、と。それは何？」

今までに見た事の無いアークロイヤルの態度に内心慌てつつビスマルクは聞き返す。

アークロイヤルが妙な威圧感を発しながら自分に接近して来る。

そして、アークロイヤルは片手を腰に当て、もう片方の手の人差し指でビスマルクの胸元をトントンと叩きながらこう言う。

「お前に再会するまで、私がどれだけお前の事を想い続けて来たかわかってるのか？」

「……………」

「今でも気持ちは変わってない。むしろお前の事がますます好きになってるんだ。はつきり言って私にはお前以外考えられない。その辺りがまだ理解して貰えて無いようだからな。……そこが気に入らない」

こう言われてしまったから気まずそうにビスマルクは目をそらしてしまう。

ビスマルクの嫉妬は自分への好意の裏返しであり、それだけ自分の

事を好きでいてくれているというのが分かった事は素直に嬉しい。その一方で、安易に他人に流されるタイプでは無いと自負しているし、自分のビスマルクへの気持ちや曲げる事など決してしないという自信があるにもかかわらず、彼女にそれを信じて貰えていなかったという側面があるのもまた事実であって、その点では複雑な気持ちにさせられてしまうのはやむを得ないと言えた。

その点は悪かったなと思うし、どう答えばいいんだろうとビスマルクが内心そう思っていると、先にアークロイヤルが口を開いた。

「まあ、私だってお前の事は言えないんだけどな」

アークロイヤルはそう言う。

「お前が他の奴らといるときは今だにモヤモヤしてるよ」

柔らかい表情に戻っていたが、そこに混ざっているのはほんの少しの困惑。惚れた相手が他人といれば嫉妬してしまうのは自分も経験済みだから共感は出来る。ただ、本来ならばそんな事で相手を困らせたくはないのだが、その手の感覚は今だに自分の中に居座り続けていて手を焼いているというのが実情だ。しかもこれはある程度時間をかけたくらいでは正出来るような類のものでもなさそうである。

だからアークロイヤルも正直な事を言う。

「分かっているとは思いますが私は嫉妬深い。自分だけが空回りしてるんじゃないかって思う事は今だによくあるんだ」

「……空回りはしてないと思うわよ?」

「そうみたいだな」

アークロイヤルは両手をそつとビスマルクの頬にそえる。

「嫉妬してしまうっていうのは、恐らく今の私達ではすぐにどうこう出来るとかそういう物ではないと思うんだ」

「うん……」

「だから嫌な気分になったのならせめてそこだけはすぐにでも言ってみて欲しい。一人で困ったまま距離が出来ているなんて絶対に嫌だからな」

「そうね、伝えるわ。でも、それはあなたもしてくれないと嫌よ?」

「当然だ、これでもかかっていう位伝えきってみせるよ」

ふふ、と笑ってビスマルクはアークロイヤルの額に自らの額をくつつける。

「私、あなたに甘えてばかりね」

「今までは私がお前に甘えてばかりだったじゃないか。少しくらいは甘えてくれ」

「じゃあ、約束」

アークロイヤルの唇にビスマルクの唇がそつと重なった。

「この私を捕まえたのはあなただからね？ 離さないわよ？」

そう言われたアークロイヤルはクスリと笑ってビスマルクを抱き返した。

それから数日後。ビスマルクが他の艦娘達と話していた。

彼女の周りには少なくない人が集まっていて、かなり明るい雰囲気でも会話も盛り上がっているようだ。しばらくして散会となり、誰も居なくなったのを見計らってアークロイヤルはビスマルクに話しかけた。

「……相変わらずの人気みたいだな」

流石にあからさまな嫉妬はしなくなっていたが会話の内容はやはり気になったのでとりあえず聞いてみる。

「で、何の話をしてたんだ？」

それに対してビスマルクはあっさりと答える。

「ええ、今度のオフにあなたとデートするじゃない？ その辺り景色々とね」

「……………はい？」

アークロイヤルは目を大きく見開いたままフリーズしてしまう。

「あなたも最近色んな子と話をしてるでしょう？ そういう子達は私の知らないあなたの事もよく知ってるでしょうし、デートでヒントになりそうな情報が得られそうだから今私が考えているプランを具体的に話してみても内容を整理してたのよ」

「おい、そういうのみんなにも全部オープンにしてるのか!？」

「ええ、そうよ？」

アークロイヤルは自分達のプライベートがビスマルクを通じて垂れ流しになつていゝらしいと分かつて思いきり慌ててしまふ。

「でもな？　そういうのはあんまり大っぴらにするような物でもないと思うぞ？」

「そうかしら？　こゝろやつて予め言っておけばあなたを狙う子も出て来なくなると思うし、一石二鳥だと思ふんだけど」

どうもビスマルクは変な方向に吹っ切れてしまったらしい。

「いや、もしかしたらそれはそうかもしれないけどな!？」

先日お前以外は考えられないと伝えただけだろうが、と言いたるところなのだが、それを聞き入れてくれるような状態でもなさそうだ。

薄々と感づいてはいたものの、どうやらこのビスマルクという艦娘はアークロイヤルが当初思っていたよりもはるかに情熱的な女の子であつたようだ。

「さあ、これで情報は一通り集まつたわ。早速あなたの意見を聞かせて欲しいのだけど」

目を輝かせながら言うビスマルクを見て、アークロイヤルは、

(……仕方が無いなあ)

と思ひ、苦笑いしつつ、ビスマルクの質問に答え始めた。

これからはビスマルクに振り回されるようになるのかなと感じつつ、それはそれで悪くないのかもしれないなど、アークロイヤルはそんな風にも思うのであつた。

なお、この打ち合わせの際に今度のデートでお揃いのアクセサリーを買おうと提案されてしまい、流石に気恥ずかしさから難色を示してはみたものの、ビスマルクが猛プッシュを仕掛けてきたために防戦一方でタジタジになつてしまったアークロイヤルが他の艦娘によつて目撃された事も蛇足ながら追記しておかねばなるまい。